クラスメイトKがドジっ娘の世界にて大暴れ！？

ちびっこ＆ひばりの

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは雲雀恭弥が大好きな２人の作者がノリで書いた話です。

※注意　この話は雲雀恭弥誕生日企画として「ちびっこ」の『クラスメイトＫ』と「ひばりの」の『ドジっ娘は風紀委員長様のおきにいり!?』のコラボ作品です。２つの作品を読んでいなければ、話がわからないと思います。

目次

登場人物紹介 ―― 1
プロローグ・5月2日　am.7:00 ―― 4
5月2日　am.8:00 ―― 9
5月5日　am.8:00 ―― 15
5月5日　am.9:00 ―― 23
5月5日　am.10:00 ―― 30
5月5日　am.11:00 ―― 36
5月5日　pm.1:00 ―― 44
5月5日　pm.3:00 ―― 54
5月6日　am.7:00 ―― 62
5月6日　pm.3:00 ―― 70
5月6日　pm.4:00・エピローグ ―― 76

登場人物紹介

『クラスメイトK』の人物紹介

神崎サクラ

「クラスメイトK」の主人公。武器はハリセン（殺傷力ゼロ）。人見知りで基本無口。原因は目立つ兄のせい。マンガ好き。ツナ君に触れたことで原作知識を得た女の子です。いろいろあって、今では仲良し？です。めんどくさがりで、たまに見捨てることがあります。でも、ポケットにランボ用の飴が常備しているので、基本はいい子のはず。

原作知識のことを、自分のいない未来という風に置き換えて、リボーンとディーノさんにわかると伝えている。

（兄に隠れがちですが、地味に残念な子）

神崎桂

サクラの兄。サクラが大好きで、サクラが大好きで、サクラが大好きな、残念な人。ただし、普段の行動に騙されるだけで、ちゃんと考えている。……時もある。考えているように見せかけて、やっぱり残念なことが多々あるため注意が必要。

フランス留学していました。この話の時では卒業してラ・ナミモールで働いてます。

（この話では残念な部分しか見れないと思うｗｗ）

謎の男

そのままの通り、謎の男。本編（ＶＳヴァリアー編終了後）でもまだチラっとしか出てきてません。

（まさかのコラボで登場し、本編に関わることが??←え）

『ドジっ娘は風紀委員長様のおきにいり!? 』の人物紹介

花内まりや

「ドジっ娘は風紀委員長様のおきにいり!? 」の主人公。究極のドジ体質の女の子です。そのせいで、入学初日から風紀を乱し雲雀さんに目をつけられています。まりやちゃんはいつも咬み殺される恐怖に怯えていますが、実はまだ1度も咬み殺されたことはありませんし、よく雲雀さんに助けてもらってます。

同じクラスの春奈ちゃんや燕太君と友達。原作キャラの中では雲雀さん繋がりでディーノさんとも仲がいいです。

（あまりにもドジすぎるので、何か呪いでもかかってるんじゃないかと密かに疑ってます。そして、雲雀さんとの今後の関係にも注目してます！）

東山春奈

主人公まりやちゃんのクラスメイトで友人。ズバズバと毒を吐き、周りを怒らせることも多い。でも、ちゃんと人を選んで言ってるっぽいです。彼女は雲雀さんに興味があるようです。後、頭が良くて危機管理能力もありそうです。他にも意外な人物に憧れているようで……。

（多分、この作品では彼女が1番残念）

新垣燕太

主人公まりやちゃんのクラスメイトで友人。本人曰く、春奈ちゃんとは腐れ縁。そのため春奈ちゃんから攻撃の1番の被害者。彼のツッコミ体質は春奈ちゃんの言動のせいでしょう。

サッカー部に所属し、運動神経抜群。山本君とはスポーツ仲間のため、山本君の天然ボケにツッコミすることが多い。

（苦労人。だけどサッカーバカ）

花内蒼哉

主人公まりやちゃんの弟。ゲーマーで、姉のまりやをなぜか敵対視している。雲雀さんに憧れているようです。

（雲雀さんに憧れているのに、この話では絡まないｗ）

プロローグ・5月2日　ａｍ．７：００

今日もオレは空から見下ろす。毎日、毎日同じ繰り返しだ。
平和だ。平和すぎる。
オレの計画ではもっと面白くなるはずだった。
あいつが邪魔をしたのだろう。
オレはあいつが嫌いだ。
だからオレはあいつが好きな世界で楽しもうとした。
しかし、また邪魔をされた。
オレが捕まらなかったのはあいつは後だししか出来ないからだ。
それもオレが使った同じ力の量しか使えない。
おかげでオレは今ここに居る。
もしオレが直接壊せば、あいつに気付かれ今度こそ捕まる。
この世界を気にしなければ、あいつはオレより力が強い。
迂闊には手が出せない。
だが、何もしないわけではない。
オレにはまだ手駒が残っている。
もうあいつに気付かれてるだろうが、関係ない。
オレと違い、あいつは正しいからな。
そうと決まれば、手駒の力を解放させる。
平行世界ではない。
決して交わることがない似た世界と融合を起こす大きな力。
これはあいつでも簡単には元に戻せない。
もちろん力の軸はオレではない。
正しいあいつが手が出せないオレの手駒だ。
指を鳴らし、オレは封印していた力を解放させた。
さぁ、楽しませてくれ。

「たのもー！」

相変わらずうるさい。兄にランニングを誘う笹川了平の声でまた起こされた。そもそも毎日毎日走りこみしてどうするんだ。
いろいろ頭の中でツッコミながら、ベッドからしぶしぶ起き上がる。私が笹川了平の声で起こされることを、兄に文句を言わないのは、起きなければならない時間に近いからだった。更に兄のハイテンションに邪魔されることなく、準備が出来るのだ。多少のうるささは我慢できる。

今日は運が悪かったらしい。今日も、の方が正しい気もするが。
「今日も可愛いよ、サクラ。さらわれないように気をつけるんだよ！」
「……ん」
もう少し走りこみをしてくれてもいいのだが……。そう思いながらも返事をした。返事をしないと面倒なことになるからな。兄は私の気持ちに気付かないようで、嬉しそうに見送りしようとしていた。
「いつも思うけど、玄関でいい」
兄はわざわざ外に出て、見送りするのだ。外でばったり会ったならわかるのだが、玄関で会ったなら外に出る必要がないと思う。
「サクラ、僕は好きでしているのさ」
兄がそういうならば、そうなのだろうと納得した。そして、この後に続く言葉で納得したことに後悔した。
「僕のことを気にして何度も振り返る姿が可愛いからね」
うっとりするような兄の顔を見て、もう絶対に振り向かないと心に誓い、学校に向かうことにする。兄が何か叫んでるが全て無視だ。気になって振り向くことになるからな。
「っ!?」
急に後ろから腕を引っ張られバランスが崩れる。しかし、背中に何か当たり、転ぶことはなかった。見上げると兄の身体のおかげで転ばなかったようだ。ただ、先程まで家の前に居た兄がなぜここに居るのだ。……腕を引っ張ったのも兄な気がする。まさか無視をしたことで怒ったのだろうか？私の兄が？
「気をつけたまえ、サッカー少年！　もう少しでサクラとぶつかると

ころだったよ！」
「わ、悪いっ」
「サクラ、怪我はなかったかい？　痛いところがあれば、僕に言うんだよ」
　兄は私のために腕を引っ張ったようだ。そのおかげで怪我はしなかった。だが、注意したくせに相手の反応を無視するのは止めろ。
「大丈夫。それと助かった」
「気にする必要はないのだよ。サクラを守るのは僕の使命なのさ！」
　兄の言葉をスルーし、ぶつかりそうになった相手を見る。兄の言うとおり、サッカー少年のようだ。ジャージにショルダーバッグ。それだけならばスポーツ少年なのだが、サッカーボールを持っていた。恐らく彼とボールは友達なのだろう。今度、雲雀恭弥を捕まえてみてくれ。
「……私も悪かった」
「あ、ああ……。俺の方こそなんか悪かった」
「仲直りの握手だね！」
　なぜそうなるのだ。そう思ったのは私だけでなく、相手も思っていそうである。そもそも私達はケンカをしたわけではない。いや、それ以前に初対面である。ツッコミする場所が多すぎて困る。とりあえず、拒否しよう。初対面の相手と握手するのは嫌だ。
「握手はしない」
「!?　すまない、サクラ。僕としたことが……。サッカー少年よ、サクラに触れるなんて１００年早い！」
　威張ってる兄の頭をスパーンとハリセンで殴り、サッカー少年にさっさと行けと手を振る。朝から災難だったサッカー少年にいいことがあればと少し願った。

　学校に着くと珍しく山本武からの挨拶がなかった。面倒なので私はないほうが嬉しいのだが、少し気になり教室を見渡せば、納得した。まだ教室に来ていないだけだった。
　しばらくボーッとしていると声をかけられる。

「よっ！　神崎！」
「……ん。はよ」
　遅れていただけで、彼はいつも通り元気だった。しかし、一緒に登校したのか、偶然会ったのかはわからないが、山本武の隣に居る沢田綱吉は元気がないようだ。両肩がさがり、いかにも憂鬱そうだからな。そのことに獄寺隼人も気付いたらしく、慌てて駆け寄ってきた。
「１０代目！　おはようございます！」
「う、うん。おはよう、獄寺君……」
「何かあったんスか？　オレはいつでも力を貸しますよ！」
「ありがとう。獄寺君」
「で、どいつをシメればいいんスか？」
　私の席の前で話を続けるな。それも内容が物騒である。沢田綱吉が必死に獄寺隼人をおさえているが、彼らの前で一人だけ座り、黙ってる私が黒幕に見えそうなのだ。
「それで何があったんだ」
「……神崎さん！」
　沢田綱吉が嬉しそうな顔をした。恐らく話題を戻したから喜んだのだろう。正直なところ、私はさっさと話が終わってほしいだけなのだが。なので、場所を移動してもらえるのが個人的には1番嬉しい。ちなみに、移動してくれと言わなかったのは、獄寺隼人にキレられると予想したからである。
「さっき山本と一緒に先生に呼び出されて……この前のテストが赤点だからＧＷは補習だって……」
「……ああ。野球の練習時間が減るのは勘弁してほしーよな」
　沢田綱吉は練習時間じゃなく遊ぶ時間だと思うぞ。しかし、これは自業自得だろ。赤点をとった彼らが悪い。私はマンガを読む時間を減らしたくがないために勉強しているからな。
「はぁ……」
「頑張れ」
　あまりにも沢田綱吉が落ち込んでるため、本音は言わず、慰め声をかける。私は心が広いのだ。

この時の私は知らなかった。関係がないと思っていた補習に参加するはめになるとは……――。

5月2日　ａｍ．８：００

「おはよ～……」
　ボソッと私がそう呟いて教室に入ると、案の定クラス中の視線が集まってきて、居た堪れなくなる。
　フラフラな足取りで教室に入ってきた私に、春奈ちゃんが駆け寄ってきた。
「おはよう、まりやちゃん。それで、朝からなんで体中泥だらけなのかしら？」
　まるでクラス中の視線を代表するかのように、春奈ちゃんがそう笑顔で尋ねてくるのに羞恥を覚悟で答える。
「……朝、普通に登校していたんだけど、なぜか道にあるマンホールの蓋が開いてて……」
「ああ、落ちたのね」
　全てを察したようにそう言った春奈ちゃんの一言に、ただ頷くしかなかった。
「はよー。って何なんだよこの匂いは……　臭っ」
　そこに、私が入ってきたのと同じドアから朝練帰りの新垣君がひょこり顔を出しては、すかさず手で鼻を押さえていた。
「ちょっと、燕太！まりやちゃんになんてデリカシーのないことを言うのよ！」
「……そういうお前は、どこから取り出してきたか知らねえ洗濯バサミで鼻挟んで、花内と距離置こうとしてんのは何なんだよ」
「だって臭いんだもん」
　まさかの友人二人から立て続けに臭いと言われて、私の残り少なかったＨＰが終わりを迎えた。
　そんな私を、咄嗟に新垣君が宥めてくれる。
「そう落ち込むなよ、花内。誰だってマンホールに落ちることの一回ぐらいあるだろ」
「……新垣君は、あるの？」
「あっ」

うん、そんな枯れた声が返ってくると思ったよ。
「いやそのっ、別にドジ踏むのは花内に限ったことじゃねえだろ？俺だってついさっきろくでもねぇドジ踏んできたところだぜ？」
そんなちょっと近くのコンビニでアイス買ってくるわー的なノリで語られても……　それに私のドジに比べたら、新垣君の失態なんてまだまだ青いもんよ。
「ふーん、サッカーボール股間に当たった？」
「堂々と下ネタかよ。んなワケあるか。まぁ些細なことなんだが、今朝は少し急いでて、俺の不注意で女子とぶつかりかけたんだ」
「うわー、事故を装って朝から堂々セクハラですか。まりやちゃん、こいつの半径５ｍ以内に近づいちゃダメよ」
「だから下ネタじゃねーか！しかも範囲が広えよ！お前と違って俺はちゃんと常識人なんだよ!!」
いつも通り二人のいがみ合いが始まった。こんな時にまで私を放置で二人で話を進めないでよ。進んでもいないけど。
とにかくこのままだと面倒なので、マンホールの汚水に落ちて腐臭が満遍なく染み込んだ鞄を彼らに掲げて有無を言わさず二人を黙らせた。それでよろしい。でもぶつかりかけただけじゃ、やっぱりドジなんて言えないよ。
「それで、俺はそいつに謝ったんだが、そいつの隣にいた奴がなんか変な奴で、ネチネチ面倒だったんだよ」
「変な奴？」
その時のことを思い出したのか、苦虫を噛んでいる新垣君の顔色を見て、何の興味が湧いたのか春奈ちゃんが執拗に彼に尋ねている。
彼女に半ば引き気味ながらも、新垣君は頭を掻きながら記憶をたどっていって、私たちにこう語ってくれた。
「例えて言うなら、特撮アクション映画に仮面被って出てきそうな暑苦しい雰囲気醸し出して、口調も変な奴だったし……　ああ、あとその女子にハリセンで脳天ぶっ叩かれてたな。よく分かんねえけど、本当朝から災難だった」
この人はただ顔見知っただけのその人たちに一体何の恨みでもあ

るのかっていうくらい、その人たちに対して失礼極まりない言葉を吐いている。
「それにしても……　やっぱちょっと臭うな……」
「まりやちゃん、着替えとか持ってきてないの？」
二人がそう口を揃えて聞いてくるけど、今日は体育がないので体操着などの替えは何ひとつ持ち合わせてはいません。
彼らに言えば、二人は揃って一斉に私のもとから後退っていった。……何これ、ちょっと酷くない？言っておきますけど、汚いマンホールに頭から落ちて、現在進行形でそのくっさい臭いを間近で嗅いでいる私の方がずっと辛いんだからね!!
そう言葉にならない心の叫びを上げているところに、すぐ後ろで物音がした。
「……また君か、ドジっ娘」
教室のみんなの視線を集めたそこにはなんと、我らが並盛中学校の頂点に君臨していらっしゃる最恐風紀委員長の雲雀さんが、朝から不機嫌なオーラを漂わせて私のすぐ後ろに立っていた。つまり、彼の視線の先には私がいて、もちろん獰猛な目をした彼とバッチリ目が合いました。
「な、なんで雲雀さんがここにッ…!?」
ちなみに、”ドジっ娘”とは私のことです。彼の前では度々ドジをして難を逃れていると、彼からはいつしかそう呼ばれるようになりました。別に全然嬉しくないけど。むしろ一番の興味対象物にされて、毎日牙で襲われないかヒヤヒヤしております。しかもこんな時に限って雲雀さんが態々教室までやって来るなんて、今日は初めて会うのにまた何を自覚なしにしでかしたんだ、私ッ!?
「学校の廊下中泥だらけになっていると連絡が入ったから、その泥をたどって来てみればここにたどり着いたワケだよ。それより、これは風紀委員会への申請なる果たし状と受け取っていいんだよね？」
違います違います。完全にあなたの誤解ですから、その懐から黒光りしているトンファーをいますぐお仕舞いください。
「ねぇ、雲雀さんまた来てる……」

「見ろよ、あいつ雲雀さんとあんな慕し気に話してるぞ」
「どうやら雲雀さんのお気に入りらしいぜ」
「えっ、それってあの二人つまり……」
「へぇ……　不良の頂点に君臨する最恐の風紀委員長に、人類の希少価値である最大級萌え要素のドジっ娘ね。……なかなかお似合いじゃない」
「……噂って怖ぇー……」
　今日は特に外野がうるさいようで、せめて本人たちには聞こえないようにする配慮はしなさいよ！だから全部丸聞こえなんだって！
　全く成長のない周りの野次たちに、さらに拡散していく噂にももう耐えかねて、私はいくらかトーンを落とした声で雲雀さんに話しかける。
「雲雀さん、ひとまず場所を移しませんか？」
「嫌だね」
「いや、即答ですか!?なんで!?」
「君が動くと泥が垂れる。だからそこから一ミリたりとも動くんじゃないよ。またその泥で僕の校舎を汚したら、咬み殺すのに容赦はしないよ」
　い、今まであなたが加減してきたことが果たしてあるのですか!?毎回毎回、無鉄砲にその牙振り回してくるくせにいいぃ!!
「……ていうか、臭いよ、君。まずその臭いをどうにかしなよ」
　動くなと言えば次は無茶振り!?動けないのにどうしろっていうの!?
　でも、臭さがこの時は役に立ったようで、雲雀さんは私に手が出せないでいるようだ。自分の牙に臭いが付くのに抵抗があるようで、まさか臭さに身を守られるとは思ってもみなかったけれど、結果オーライだった。
　臭い私に手が出せないままでいる雲雀さんは、このままでは埒が明かないと思ったんだろう。今回も諦めたようにトンファーを仕舞って、すると風紀委員たちを呼んで総勢で廊下一面に新聞紙を敷かせていた。これなら確かに歩いて泥が落ちたとしても心配いらないけれ

ど……　ここまで大袈裟にやることかなぁ。こんなことで風紀委員の皆さんにはまた迷惑をかけてしまったようで、すごく申し訳なかった。

女子更衣室にあるシャワーで体中の泥を落として、雲雀さんからは風紀委員会の学ランを借りて着替えると、私は制服が乾くまでの間、応接室にて待機することになりました。

学ランを借りたのはいいのだけど、男物でちょっとぶかぶかなのが気になるところ。それに袖にはなぜか風紀の腕章付きだし。私は別に風紀委員ではないので、雲雀さんに断りを入れて外そうとしたら彼からは「取るな」とこの日一番の殺気を帯びて暗に目で言われた。腕章はこだわりだったのか……。

学ランを借りたことで、そのお礼というか、彼からいつも通り雑用を任されてしまった私は、頼まれたお茶を書類整理に追われている雲雀さんにそっと差し出すと、湯呑みを受け取った雲雀さんはふとこう漏らした。

「ああ、そうそう。ついでとして言っておくけど、君は補習組だから、明日からのゴールデンウィークには学校に来ること」

「はいはい、補習ですか。明日も学校に行けばいいんですね。分かりましたよ、って何ですって!?」

あまりにも会話の中に溶け込んでいたので、ついそのまま流されかけてしまった。

気を取り直して、私は悠然と湯呑みを啜っている雲雀さんに詰め寄っていく。

「ななんでゴールデンウィークに補習なんかがあるんですか!?説明してください！」

「知り合いに頼まれてね。僕としても、長期休暇に浮かれた草食動物たちの群れが並盛をうろつくのは好ましくないからね。そこで、先日のテストで赤点を取った者をゴールデンウィーク期間中補習に来るよう仕向けたのさ。もちろん君もだよ、ドジっ娘」

……なんてことだ。なんでことを仕向けてくれたんですか、こんにゃろおぉぉッ!!

「い、嫌です！ゴールデンウィークには家族で故郷に帰って、地元の友達とも会う約束だってしているのにっ……　補習になんて行きたくありません！」
　涙ながらに懇願する私に、しかし鬼の風紀委員長様は冷たく現実を突き返してきた。
「学生の本分である勉学を怠った君の自業自得だよ。諦めるんだね。
　だけど、それでも補習に行きたくないと言うのなら、君の家にまで僕が直々に咬み殺しに行ってあげるよ」
　……逃げ道は絶たれた。こうして、私の補習行きが確定した。

5月5日　ａｍ．８：００

雲雀さんから補習への強制参加を告げられるとあっという間に時間が流れ、ゴールデンウィークへと突入した。

ワイワイキャッキャと母と蒼哉が私を放置して、ゴールデンウィーク初日に里へと旅立って行った。その姿を呪いながら、三度目の補習へ出向くため現在重い足取りで通学の歩みを進めている。

ああ、楽しいハズのゴールデンウィークがどうしてこんなことに……。

「危ないよ」

「きゃっ」

気分が沈んでいたところにいきなり腕を掴まれたので、驚いてそんな声を出すと咄嗟に顔を上げた。

「すまなかったね。いきなり女性に触れるのは失礼だが、電柱にぶつかりそうだったからね。助けないという選択肢は僕の辞書にはなかったのだよ。大丈夫かい？」

そこには外国人のような端整な顔立ちをした綺麗な男の人が、心配してこちらの様子を窺っているようだった。

そして彼の言う通り私の眼前には電柱の硬いコンクリートの表面があって、瞬間顔がサーッと青ざめた。

危ないところを助けてもらい、私はすぐにお兄さんにお礼を言う。そのお兄さんは爽やかな笑顔で満更でもないようだ。それにしてもカッコいい人だな。モデルさんとかかな？雲雀さんとは違って、紳士的でとっても素敵。あの人はカッコ良くても中身がちょっと残念というか、横暴過ぎていつも参ってしまう。

「気をつけたまえ、傷は作るものではないよ。特に君は女性なのだからね！

さて、そろそろ僕は行くよ。まだランニングの途中なのでね」

紳士なお兄さんはそう言った。ああ、だからジャージを着ていたんだ。深く納得する。

最後に私にさよならを言って、お兄さんは颯爽と私が来た道の方へ

と駆け出して行ってしまった。
その背中に、大々的な桜の花と『ＬＯＶＥ』のロゴが目に映って、実は結構残念な人なのかなと、また不意に溜め息が漏れた。
朝から思いも寄らない出来事に遭遇したけど、早く行かないと遅刻になって雲雀さんに咬み殺されるかもしれないので気にしないで先を急ぐ。補習に参加しているのに遅刻扱いで咬み殺されるなんて、たまったもんじゃない。
私はスタスタと校門を潜り抜けて、入学式から見慣れた教室のドアをスライドさせて顔を出した。
「よぉ、花内」
教室には私と同じ補習組である新垣君が、かったるそうに机の上に教科書をバラバラと開き、その上に寝そべって勉強をサボっていた。彼はサッカー以外のことになると、極端にやる気をなくすある意味で問題児なのだ。そんな彼が、補習だからと真面目に勉強するとは私も思っていない。
「おはよう、新垣君。……寝てたの？」
「まあな。さっき起きたが、また二度寝するところだ」
「何回二度寝するつもりなの……　形だけでも勉強しているようにしないと、見張りの風紀委員の人たちに目つけられるよ？」
姿勢を伸ばして欠伸を漏らすと、眠そうな眼で新垣君が愚痴を漏らしていく。
「こっちは休みにも拘らず補習に来てやってんだ。それだけで十分あいつらは満足なんじゃねえのか？ゴールデンウィークに補習なんざ、一体何考えてんのか知らねえが、おかげでこっちは貴重なサッカーの練習時間を潰されてんだよ。マジでふざけんなよな」
補習になったのは自業自得だと彼に言ってあげたいけど、私自身現に今その状況にいる立場なので正面から彼に言うことは出来なかった。そして、そのまま新垣君は二度寝してしまった。ここ二日ずっとこの調子なので、私ももう諦めて自分の勉強に専念しようと机に向かった。
だけど、ガラリとその時教室のドアが開いて彼が現れるとは、不意

打ちだった。
「……何してるの？」
ちょうど席に座ろうとしたところに雲雀さんが前方のドアから入ってきて、驚いた拍子に体の軸がズレて、私は見事に椅子から転げ落ちた。自分でも相変わらずのドジっぷりだなと思う。
雲雀さんは入ってきた途端に私が床に転げ落ちるのを見て、普段より一層哀れなものを見る目で私を見ていた。そんな目をするくらいなら、もういっそ咬み殺してくださいよ。実際には口が裂けても言わないけど。
そこに、私の転倒時に出した大きな音を聞いて、新垣君が何事かと起きてきた。彼は私と同様に、起きたと同時に視界に入った雲雀さんの姿に拍子抜けした顔をして固まっている。ここ二日サボっていたし、咬み殺されるんじゃないかって肝を冷やしているみたい。
一方で雲雀さんは、新垣君には目もくれずに教室内を見渡している。
一通り見たところで、ポツリと呟いた。
「全員揃っているようだね」
「あ、あの、どうして雲雀さんがここに……」
「無論、風紀委員会の仕事だよ。僕以外他の委員の奴らは今日は休暇を取っていて、ここには僕しかいないからね。補習をサボろうだなんて思わないことだね」
そう言っては怪しい笑みをニタリと湛えて、スタスタと去って行った。
新垣君を含め、補習をサボっていたクラスのみんなが、その脅し文句に肩を震わせていた。
「花内、なんか俺、急に目が覚めたよ」
「うん、その調子で補習も頑張っていこう。新垣君」
新垣君とお互いを慰め合っていたその一方で、私たちの知らないところではカオスな補習授業が繰り広げられていることなど、まだ知る由もなかった。

クソッと苛立ちながら、学校に向かう。休みの日に制服を着るはめになるとは思わなかったのだ。
事の発端は昨日の夕方だった――。
私はマンガを読み、マンガを読みという素晴らしいゴールデンウィークを過ごしていた。もちろん宿題はある。が、初日に全て終わらせたのだ。わからないところがあれば、兄に聞けばよかったしな。
残りの休みを趣味に没頭できるとは素晴らしいと思いながら、古本屋に向かっている時に事件は起きたのだ。
「ちゃおッス」
相変わらず神出鬼没すぎるだろ。そう思いながら、視線を合わせる。
「明日はサクラも学校に来いよ」
「断る」
明日もマンガを読む予定があるからな。そもそもなぜ学校に行かなければならないのだ。補習に関係がなければ行かなくてもいいはずだ。そのため、私は休みを満喫できるために勉強したのだ。欠点を免れた私は学校に行く義務はない。
「そうか。なら、明日はヒバリが咬み殺しに来るサプライズを用意しておくぞ」
それはもう脅迫だろ。私に行かない選択を取らせないつもりだろ。しかし、リボーンが女子の私を脅迫するほどのことだ。行かなければならないことなのだろう。
「……何か、あるのか？」
私の知らないところで何か起きてるのかもしれない。不安になった。
「面白そうだからな」
「……君の暇つぶしなのか？」
「じゃ、待ってるぞ」

リボーンが去った後、何ともいえない空気が流れる。……なぜ私が行かなければならないのだ。理不尽である。

教室に入ると沢田綱吉が死んでいた。いや、生きているのだが、補習が過酷なようで机の上で魂が抜けそうになっているのだ。
「よっ、神崎！　どうかしたのか？　忘れ物か？」
もう1人の補習者はいつもと一緒で元気なようだ。出来れば、私の存在には気付かないままで居てほしかった。彼らに気付かれなければ、これから起こるイベントに関わらなくても済んだ気がするからな。……リボーンに声をかけられた時点で、不可能な気もするが。
「用事」
「そっかそっか」
私がここに居ることに疑問を持たない山本武を放置し、席に座った。
教室を観察していると、疑問が出てくる。なぜ獄寺隼人がいるのだろうか。恐らく沢田綱吉関係なのだろう。彼がここにいるせいで、ますますリボーンが何かして来そうな気がする。……声をかけられた時点で、何かするのは決定事項だが。
先程から同じような答えにたどり着いてる気がする。どうやら、まだ私は諦めきれていないようだ。余程参加したくないのだろう。
そもそもリボーンは学校に来いと言っただけだ。当たり前のように席に座ったが、その必要はない気がする。私は『学校には来た』からな。帰っていいだろう。
席を立とうとするとドアが開く。知らない顔だった。学生なのは間違いないが、クラスメイトではない。……多分。
「全員ちゃんといるかしら？　じゃあ席に着いてー」
学生と思ったが、違うのか。いや、制服を着ているので学生であっているだろう。どう見ても私と一緒ぐらいの年齢だしな。メガネをかけているから、委員長なのだろうか。ちなみに、メガネ＝委員長は勝手な私のイメージである。出来れば、縁なしメガネじゃなく、縁あ

りで三つ網にしてほしいのだが。
委員長（仮）は出席を取り始めた。それはいいのだが、なぜか私の名もあった。元々、私は補習ではなかったはずだが。リボーンが関係している気がする。恐らく、すり替えたのだろう。

さて、これはどういうことなのだろうか。委員長（仮）と思っていた人物がそのまま授業を始めたのだ。もしや彼女はコスプレをしてるのだろうか。痛すぎる。
「ハイそこッ！　今、人を『いきなり現れて委員長かと思えば教師紛いに出席取って、挙句には制服なんか着てイタイ奴だ』なんて顔をしたそこのあなた！　どこかのサッカー小僧みたいにネチネチつっこんでないで、真面目に授業を受けなさい」
私の心を読んだのだろうか。だが、本当に心を読めるなら、原作のことなどを考えていることもバレているだろう。つまり私が顔に出しすぎたのか。
とにかく、くだらないことを考えていたのがばれたようだ。しかし、補習組みじゃない私は話を聞く必要がない。怒られるのは理不尽である。
そもそも彼女はいったい何を話しているのだ。唯一わかるとすれば、全く授業には関係ないということ。先程より沢田綱吉が魂が抜けかけてるし、獄寺隼人がキレそうである。
嫌な予感がして、本気で帰ってもいいのかと思い始めた頃、ドアが開かれる。
「春奈ぁぁぁぁぁぁ！　なんっでお前がここにいんだよッ!?」
「あら、遅かったじゃない。自分の担当放ったらかしてまた爆睡しているのかと思ったわ」
「うるせぇよ！　俺はいつからそんな担当づけされたんだ!?　つーか、何なんだよその眼鏡は。お前の視力は鷲並みだろうがっ」
「何言ってるのよ、燕太。テレビでもゲームでも、デキる女教師に眼鏡は必須アイテムよ」

「教師の前にテメェは並中生だろうがっ」
よくわからないが、やはり彼女は教師ではなかったようだ。ふと気付く、彼女はリボーンの差し金かもしれない。しかし、私の知識では彼女は原作に登場しない。注意している男も違う……はず。どこかで見たことがある気がする。私の気のせいだろうか。どちらにしても私の原作知識は薄れていく感じが一切ないことを考えると、彼女達は原作キャラではない。
私が考えてる間も2人はまだ言い合っていたようだ。若干、男の方が言い負かされてる気がするが、放置することにした。私はこの騒ぎに生じて逃げようと考えたのだ。私が逃げれる確率があがるならば、2人の言い合いは大歓迎である。
タイミングを見計らい、今だ!と腰を浮かせた時、美声が聞こえた。
「君達、何してるの」
慌てて腰を下ろし、私は何もしていないという態度を取る。素晴らしい美声は聞きたいが、咬み殺されたくはないのだ。
雲雀恭弥と目を合わせないようにし、リボーンを探す。ここで彼が来るのはどう考えてもリボーンの差し金しか考えれないのだ。全く、どうするつもりだ。
リボーンを探していると黒板の日付に目がとまる。そういえば、今日は5月5日だった。つまり雲雀恭弥の誕生日だな。どうでもいい知識である。私は彼から上手く逃げる知識がほしい。
逃げることばかり考えていると雲雀恭弥が去っていった。全く聞いていなかったので、何があったのかはわからないが、ラッキーだというのはわかった。今日はいいことがありそうだ。
……リボーンに学校に来るように言われた時点でそれはないな。雲雀恭弥から咬み殺されなかったのは、この登場はリボーンの予定にはなかっただけだろう。
リボーンで思い出した。彼女達の存在が謎過ぎる。私にわかるのは関わるべきではないということだ。彼女達は原作に登場しないだけで、重要な人物かもしれない。彼女達の知識がない私はいないほうがいい。原作を壊さないためにも、さっさと逃げよう。……べ、別に

めんどくさいから逃げようと考えてたわけじゃないぞ。

5月5日　ａｍ．９：００

ゴールデンウィークに登校してくるのは、きっと誰の目から見ても如何わしい姿なんでしょうね。

事情を知らない者から見れば、休日にも構わず学校の指定制服を身に纏った私の姿はまさに奇怪、風変わりなことでしょう。下手をすれば”愛校家”なんて誤解されかねないわ。

だけど、そうと理解していているにも拘らず、私はいつもの通学路を経て、普段より人気の薄まった並盛中学校へと赴いていた。

自己紹介が遅れたわ。私の名は東山春奈、ここ並盛中学校に在籍する生徒の一人よ。

ゴールデンウィークも差し詰め、風紀委員会の意向で半強制的に補習者が集うここ並中に、どうして私がやって来たのか。

先に断っておくと、私は今回の補習へ参加する義理はもとよりないわよ。

この補習には、テストで赤点を取った生徒が参加せざるを得ない。つまり、テストでオール三桁を得ている私には無縁の話なのよ。

じゃあどうしてここにいるのかって冒頭の呈示に戻るのだけど、その理由は大きくふたつ。

私は、私の最も尊敬する人物から、とある重要任務を託されたの。

その人の名は、幼い頃から何度もお父様の口から聞かされていた。

解くことは絶対に不可能だとされていた難問を、その幼い頭脳を以て全て解き明かし、学界に大きな波紋を呼んだ幻の天才数学者の赤ん坊――彼の名はボリーン博士。

ゴールデンウィークも半ば、自室に籠って愛読している昆虫学の図鑑に目を通していると、暗い部屋に突如としてスポットライトが当てられ、写真で唯一見たことがある彼の姿がそこにはあった。

私が唖然とスポットライトに照らされ光り輝く彼の姿を眺めていると、彼はゆっくりと私へ語りかけるように、おもむろにその小さな口を開いて告げた。

――東山春奈。お前のその聡明な頭脳を活かし、沢田綱吉を立派な社会の大人へと成長させるための手助けをしてあげなさい。

まさに感慨無量の計り知れない思いを、この時身を以て感じたわ。お父様の影響とはいえ、私が唯一敬うようになった偉大なるお方。そんな彼からの賛美の言葉には、さすがの私も畏れ多いと思った。それはもう、床に居住まいを正して深々と腰を折りそうなほど。

そんな人物からの直々の頼み事を、私が断るハズがないわ。結局居住まいを正して、彼に丁重に承諾の旨を伝えた。

私の返事に一度深く頷いてくれた彼は、私へと一冊の黒いノートを手渡し、気がつけば暗い部屋に忽然といなくなっていた。

私は一度自身を落ち着かせるため深い息を吐き出して、あの方から託された一冊の黒いノートを手がかりに、任務の内容――沢田綱吉の育成計画を立案するため机に向かっていった。

校内に入ると、私は目的のクラスへ直行する足を一旦は返して、自分の教室へと向かう。

私のクラスは一年A組、そこには残念ながら赤点を取って補習へと強制参加させられている私の友達（クラスメイト）がいる。

中学に上がって出来た友達、花内まりやちゃん。彼女、実は重度のドジ体質なのよね。彼女も自身の体質には散々振り回されていて、度々そのことに悪態を吐いている始末。

しかし、私はそうは思わない。むしろ、こんなに典型的でパーフェクトなまでのドジ体質は、二次元における萌え要素には欠かせないものなの。

別にオタクというワケではないんだけど、ここまで華麗で見事なドジっぷりを魅せてくれる彼女に、私は気づけばハマり込んでしまっていた。

私が並中（ここ）に来たもうひとつの理由とは、つまりは彼女の様子見というところかしら。生態が何とも興味深いのよね。

だけど、私が朝に顔を出しに来た時にはまだ彼女の姿はなく、代わりにどうでもいいあいつの寝顔が机の上に転がってあったから、つい

でに写メって教室を後にしていった。
　ついにたどり着いた二年Ａ組の教室は、特に何の変哲もなく、固く閉ざされた扉が視界に映る。
　特に躊躇うこともなく、私は豪快にそのドアを開けて第一声を上げた。
「全員ちゃんといるかしら？じゃあ席に着いてー」
　私が来る前はあちこちで騒がしくしていた声が、ピタリと止んで視線を一線へと集める。そこにはもちろん、扉の前で佇む私の姿があった。
　補習生たちは私の登場に困惑気味でいたけれど、徐々に状況を理解してくれたのか各々の席に着いてくれた。それを合図に、私も教壇へと立ち、ひとまず確認のため出席を取る。
　今回キーマンとなる沢田綱吉は、周りと同然にオロオロした様子で席に着いていた。ちゃんと出席してくれていたので、内心で密かにホッと息を吐く。
　室内にチラチラと窺える混乱を抑えるために、私はキリリッと普段は掛けない縁なし眼鏡を掛け直し、全体に響く声で高らかに自己紹介をさせてもらった。
「今日は特別監督生として、君たちの補習の授業を担当させてもらうことになった、東山春奈です。今日だけは先輩後輩関係なく、君らの担当講師としてビシバシやらせてもらうから、甘く見ないように」
「って、なんでオレを指して言ったのー!?」
　眼鏡と一緒にこの日のために用意しておいた指示棒を、肩慣らしついでに沢田綱吉へと向けて使ってみたら、思いの外新鮮なツッコミを返されたわ。いつもはサッカー馬鹿くらいしかツッコミがいないからかしら。
「フフッ、そんな元気があるのも今のうちよ。私は今回、ある方からの命を受けて、特別レッスンを君たちに受けてもらうことになっているの。普通の教科書なんかで満足しないように、心の準備を整えておきなさい！」
「いや……　だから、なんでオレをガン見して言うんだよー!?」

フフフ、なかなか面白いわね。ダメツナこと沢田綱吉。どこかの馬鹿よりツッコミの線があるかもしれないわ。

――――と、話がだいぶ逸れてきたから、ここで戻すことにしましょう。

あの方からいただいた大事なノートを教卓の上に広げて、始業のチャイムと共に授業を始める。

「手始めに、世間の大人とはどんなものと認識しているのかしら。獄寺隼人」

「はぁ？」

堂々と机に足をかけているのがクラスの中でも目立つ彼に、回答権を与えてみる。

「当てられたら答えなさい」

「……打倒、根絶やしにしてえ奴ら」

「この人、世間に喧嘩売ってるー!?」

案外素直に答えてくれたわね。もっとつっかかってくるかと予想していたんだけど、手っ取り早いからまぁいいわ。それにあともう一人くらい当てておきましょうか。

「では、次は山本武。あなたは大人になるにはどうすればいいと思う？」

「ん？オレ？」

当てられた後はしばらく唸り、そして思いついたように拳の手を叩いた。

「みんなで牛乳飲めばいいんじゃね？」

「ただ身長が伸びればいいってもんじゃないからッ！山本!!」

山本武、データ通りの天然ぶりね。いや、もしかしたらそれ以上……

自然なボケがこんなにも恐ろしいものとは知らなかったわ。

でも、どちらも私が求めている答えとは違った。

「二人共、なかなかのセンスある回答だったわ。だけど、今の劣等化が進む日本社会に生き残るためには、普通の常識なんかで戦ってはダメ。一回りも二回りも先を見通すことが成功への鍵なのよ」

バンッと思いっきり後ろの黒板を叩き、その拳にありったけの熱意

を込めて全体に言い放つ。
「そう！今の時代は下剋上！上の者に下が力づくで勝ち取る時代！日本が何千年もの歴史の中で最も栄えた江戸の時代に習い、己の武力を高めることが成功への絶対条件なのよ!!」
「絶ッ対、ウソクセェーー!!」
　フフフッ……　沢田綱吉、私の手であなたを必ずやトップクラスの有力者に育て上げてやるわ。だってそれが、あの方の本望なのだから。
「それにはまず、基礎知識から順々に覚えていく必要があるわ。何事にも備えあれば憂いなしというもの。というワケで、今から黒板に書いてある相手を踏み躙るのに適する武器の粗方を紹介していくわ」
「この人なんか超おっかねえぇぇッ!!ていうか、そんなものいつの間に書いたのーッ?」
　ツッコミを入れ続ける沢田綱吉を余所に、私は有言実行そのままに粗方を紹介していく。時折様子を見て、授業を聞いていない粗末な輩には注意を促していたのだけれど、まさかこいつが乗り込んでくるとは計算外だった。
「春奈あああぁぁぁぁ!!」
　チッ。思わず内心で舌打ちしてしまったじゃない。
　突如授業に乱入してきた腐れ縁の燕太をつい反射で一睨み、その後は笑顔で彼に対応していく。
「つーか、なんなんだよコレッ!?どういう当てつけだ！」
　そう叫んで私の眼前に掲げたのは、今朝撮ってきたばかりの燕太の寝顔画像だった。ちなみに加工済みの、プリクラのようにプリチーな仕上がりになっているもの。
「あら、自分の顔も見て分からないの？なかなかよく撮れていると思うわよ」
「あのな、もうお前が散々俺にしてきたことは分かっているからもう口は噤んでやるからな、今すぐ出てけ。こんのクソ変人伊達眼鏡野郎」
　そうドアを指差しては、私の退場を促してくる。

ああ、もうめんどいな。こんなことになるなら画像なんて送るんじゃなかったわ。ちょっとした出来心で、補習をサボるあいつに喝をひとつ入れようと思ったのだけど、これじゃ逆効果のようね。

そんな私たちが、お互い全く引かずに言い合い続けていると、そこにまた別の声が降ってきた。

「君たち、何してるの」

その一声に、誰もが息を止めたように室内は途端に静寂へと化す。一瞬の息苦しさの後、私はおもむろに顔を上げ、この状況を作り出したやり手の人物へと視線を向けた。

開かれた扉の前に佇み、いつもの学ランではなく並中指定のベストを着込んで、こちらを蔑むような鋭い瞳で睨む人物――――雲雀恭弥。ここ並盛中学風紀委員長にして、最恐の不良生徒。その実力や顔は並盛全体で公認のほどで、下手に関われば彼の持つ牙で滅多打ちは免れない。

今の私は私情ではなく、あの方の計らいでここにいてこうしている。あの方の指示なしで、安易に彼に近づくことは許されないでしょう。

いくら目の前に魅力的な果実があっても、無闇に食べたりなんてしたら毒で呆気なく逝ってしまいかねない。ここは惜しいけど、グッと堪えるしかないわ。

「いいえ、補習授業を行っていただけです」

「君は……　補習生ではないね。どこのクラスか知らないけど、僕の許可なしで学校をうろつくのはやめてくれない。咬み殺すよ」

うほぉぉ！キタキタッ、咬み殺すよキター！生で雲雀恭弥の脅し文句があぁぁ!!あぁぁぁ、でもせめて録音しておけばよかったあぁぁ!!

「ッ――……　私は、ある方から依頼を受けて来ました。赤ん坊、と言えば分かるかしら？」

「赤ん坊の…？　……ふうん、風紀は乱さないでよね」

咬み殺されないってことは、無事に許可は降りたようね。

密かに安堵する中、雲雀恭弥がふと私の隣を睨み据える。

「けど、君はここのクラスではないハズだよ。新垣燕太……　補習

をサボる輩には、容赦なく制裁を加えさせてもらうよ」
　すると、今度は燕太に向かって、雲雀恭弥が牙を突き立てている。チラリと盗み見てみては、燕太はにわかに青い顔をして口元を引くつかせている。
　ハァ……　こいつを助けるのは癪だけど、私が写メを送ったからこいつが来てしまったんだし、こいつが咬み殺された原因に砂一粒でも含まれるなんてたまったものじゃないわ。
「燕太、そういえばまりやちゃんとは一緒じゃないの？」
「花内か？」
　私がいきなりここにはいない彼女の名を挙げたので、燕太は半ば素っ頓狂な顔でこちらを覗いてくる。
「あんた、写メを見て後先考えずに教室飛び出して来たんでしょ。まりやちゃん、あんたのことを気にして、きっと今頃校内中を探し回っているんじゃないかしら？」
　私はそう燕太にではなく、雲雀恭弥に目を向けてポツンと呟いてみせる。
　すると、雲雀恭弥に変化が見られた。
「――……君、今日は特別に見逃しておいてあげる。じゃあね」
　燕太に向かって早口にそう告げると、すぐに踵を返して雲雀恭弥は去って行った。
　雲雀恭弥が去って行く姿を、燕太は呆然としながらも、九死に一生を得た表情で見ている。対に私は、上手く彼を誘導できたことに、満足気ににんまりと微笑んでいた。

5月5日　ａｍ．１０：００

雲雀恭弥の余波がある間に、逃げようと扉に手をかけたとき、謎の人物達に声をかけられる。

「さぁ、それでさっきからタイミングを見計らうようにコソコソとしているあなた……。神崎サクラさんだったかしら。どこへお行かれに？」

どうやら彼女は笑顔で人を追い詰めるタイプらしい。残念ながら、私には効果はないぞ。お父さんが似たようなタイプなのだ。優しく言い聞かせるタイプだが、普段は私の行動に口に出さないのだ。つまり、優しく言い聞かせてるが、かなり怒っていることになる。お父さんの静かな怒りと比べれば、彼女は可愛いものである。

「あっ、あんたこの前の……」

焦ることもなく、トイレと答えようとした時、男の方に声をかけられる。やはりどこかで見たことがあると思ったのは正解だったらしい。そのどこかは全く覚えてないが。

「この前のって？」

「前に話しただろ。変な奴に絡まれたって。そんで、あの時ぶつかりそうになった女子ってのがそこにいる奴」

「うわー、悪びれもなくまた話しかけて堂々猥褻行為ですか。もういっそ頭にサッカーボール被って、愛するサッカーボールに窒息死されてください」

「……俺は今猛烈にそのフレームに嵌ったレンズをかち割って、テメェの眼球代りにサッカーボールをぶち込んでやりてぇよ」

会話の流れからして、彼は数日前にぶつかりそうになったサッカー少年らしい。らしいというのは覚えていないからである。私の記憶では、彼の顔のところがサッカーボールになっている。偶然にも彼女も同じようなことを言っているな。もちろん、自身の身体が優先なので、黙っておく。

しかし、本当に2人はいつまで話を続けるつもりなのだろうか。私はさっさと逃げたいのだが。少し悩んだ末、会話をぶった切ることに

した。
「トイレ」
２人は私の存在より、話の続きの方が大事と思ったようで、あっさりと許可が出た。そのまま帰ろう。カバンは……もういいだろう。たいしたものは入っていない。唯一気にかかるのは、沢田綱吉達が私を心配し探す可能性があるぐらいだろう。念のために後でメールしよう。

廊下を歩いていると後ろから声をかけられる。誰だと思い振り向くと笹川京子と三浦ハルだった。なぜ彼女達がいるのだろうか。私と一緒で笹川京子は補習を受ける必要がないはず。三浦ハルにいたっては、学校に不法侵入だぞ。風紀委員に見つかったらどうするつもりなのだ。しょうがないと思い、何しに来たかを聞くことにした。
「お兄ちゃんにお弁当を届けにきたの」
「ハルと京子ちゃん、２人で作ったんですー」
確かに弁当らしきものが彼女達の手にあった。かなりの量な気がするのは沢田綱吉達の分もあるのだろう
ぐうとお腹の方から音が聞こえた気がする。弁当を見て、お腹が減ってしまったようだ。そういえば、私の昼ご飯はどうするべきか。いつ帰れるかわからなかったので、パンを持ってきていたのだ。すっかり忘れて教室に置いてきてしまった。しかし、今から教室に戻る気はしない。まぁ家に帰れば、お母さんが何か作ってくれるだろう。出かけていれば、兄のところへ行こう。必ずおごってくれる。
「サクラちゃんはどうしたの？　補習じゃなかったよね？」
「……用事」
「そうだったんですかー。でしたら、一緒にご飯を食べませんか？」
丁重にお断りした。彼女達と一緒に食べれば、何のために逃げてきたのかわからなくなるからな。落ち込んだ彼女達に少し罪悪感を感じたが、我が身優先である。謎のキャラ達と頑張って過ごしてくれ。
そういえば、彼女達は謎のキャラ達のことを知っているのだろうか。少し気になったが、やめた。私が聞いたことによって、取り返し

のつかないことになれば怖い。
彼女達と別れ、今度こそ私は帰ることにする。そう意気込み、廊下を歩いてると美声が聞こえた。咬み殺されたくはないため、いったいどこにいる!?とキョロキョロしていると、靴箱近くからのようだ。
……逃げれない！
いや、まだ大丈夫だ。ここで隠れていて、彼が去ってから逃げればいいのだ。触らぬ神に祟りなし、だな。
さっさと去ってくれよと願いながら、聞き耳を立て逃げるタイミングをはかる。相変わらず、声だけはいい。
気のせいだろうか。雲雀恭弥が誰かと会話している。彼も会話ぐらいはするが、風紀委員ぐらいだと思っていた。しかし、どう考えても聞こえてくる相手の声は女性のものである。まさか女子と話しているとは。
ファンがいることは知っているが、話しかければ必ず咬み殺される。そのため、いったいどこのバカだろうと思って、覗いてみた。
目をこする。あの雲雀恭弥がまだ咬み殺していない。私は疲れているのかもしれない。ついに錯覚を見るようになってしまった。いや、もしかすると雲雀恭弥は偽者かもしれない。そう考えると隣にいる女子生徒らしき人物は術士なのだろう。
「……さっきからこそこそ隠れている君、出てきなよ」
美声も本人との違いがわからない。術士というのはこれほど凄いものなのか。1人感心していると、雲雀恭弥(偽)と目があってしまった。正しくは睨まれただが。
反応も本人のようだと思っていると、雲雀恭弥（偽）がトンファーを構えていた。ちょっと待て、とてもなく危険な予感がする。なんとか話題を逸らそうと必死に頭を回転させる。そして、いいことを思いついた。
「た、誕生日おめでとう！」
言った瞬間、後悔した。雲雀恭弥(偽)が首をひねったのだ。チラっと確認すれば、隣の女子生徒もよくわからなそうな顔をし「あの、今日は雲雀さんの誕生日、なんですか……？」と聞いてきた。つまり、術

士の彼女は今日が誕生日だと知らなかったのだ。
　これはまずいと冷や汗が流れる。雲雀恭弥（偽）の反応を術士の彼女が間違えたせいで、私は雲雀恭弥（偽）と見破っていると気付かれた。
　私の頭の中では、どうするべきか、もう終わったという2つの考えと、リボーンに対する文句でいっぱいだった。
　術士をつれてくるなら中途半端なことをするな。私が文句を考えてる間も雲雀恭弥と女性が話している。普段の雲雀恭弥ならばありえないことだ。中途半端すぎる。何を企んでるかはわからないが、見破ってしまえば完全に逃げることが出来なくなってしまうではないか。沢田綱吉達と関わると決めた時点で、ある程度は覚悟をしていたが、出来るだけ原作を壊さないように努力をしている私の身にもなってほしい。
「ちゃおッス」
「うわっ!?　どこから湧いてきた!!」
　急に目の前に現れたリボーンを驚き、勢いでつい本音が出てしまった。そもそも、そのコスプレはなんだ。いくら私がケーキが好きだといっても、ケーキの被り物だけでは私の気は治まらないぞ。中途半端なことをした責任をとって、私に甘いものをプリーズ。
　リボーンは私の考えに気付かない、もしくは気付かないフリをして、雲雀恭弥（偽）に話しかけていた。
「ヒバリ、今日は誕生日なんだろ?」
「そういえば……そうだね」
　雲雀恭弥（偽）はチラっと私の顔をみた。会話の流れでやっと誕生日と気付いたらしい。
「ツナ達がどうしてもヒバリの誕生日会をひらきてーって言ってんだ」
　絶対ウソだろと心の中でツッコミする。誰が好き好んで雲雀恭弥に関わりたいと思うのか。やっと私はここであることに気付く。リボーンはわざわざ術士を呼んだのは、本物の雲雀恭弥に断れていたのだろう。それでは面白くないため、偽者を用意したのだ。

「……ふぅん。赤ん坊がいうなら、やってもいいかな」
その答えしかないだろう。群れることを嫌う雲雀恭弥がやるとすれば、彼が興味を示すリボーンから頼まれた時ぐらいである。
「もちろん、君も参加するんだよね？」
これは私に対してではない。術士の彼女に向かって言っていた。彼女が参加しなければ、幻覚が弱まる可能性があるからな。当然、参加するだろう。
「もし僕が気に入らなければ、咬み殺す」
ぞくっとした。今の声は、この場の空気が凍るレベルの素晴らしい美声だった。偽者とわかっていれば、恐怖がないため最高である。心の中でガッツポーズをしていると、雲雀恭弥とリボーンは開催時間と場所の話をしていた。もうとっくに私は気付いているのだが。２人はいつまで演技するつもりなのだろうか。少し考え、術の影響か、ドタバタしている彼女のためにもここはツッコミしないのが優しさだろう。先程の声の礼もあったが、私にしては気が利いていると自身でも思った。

「随分、余裕そうじゃねーか」
雲雀恭弥（偽）を見送っていれば、リボーンに声をかけられた。疲れて真っ青になってる彼女よりはどう考えても私は余裕だろう。
「何か考えがあるのか？」
「全く」
考えはないが、偽者なのだ。大丈夫だろう。
「君もよくこんな手の込んだことを考えるな」
「当然だぞ。オレが楽しみてーのももちろんあるが、ツナ達を鍛えれて、運が良ければヒバリがボンゴレに入る気になるかもしれねぇからな」
私は固まった。リボーンは真面目な口調だった。今のは本音に聞こえた。
「……あの雲雀恭弥を仲間にする気なのか？」

「どうしたんだ？　サクラがツナ達にはヒバリが必要と1番わかってるだろ」
リボーンの言葉に頷く。正しくは頷くしかなかった。私の頭の中はあの雲雀恭弥が偽者じゃなかったということでいっぱいなのだ。
チラッと横目で確認する。彼女はいったい何者だ。
雲雀恭弥と会話し、咬み殺されなかった。それだけでも驚くべきことなのだが、雲雀恭弥はわざわざ彼女の参加を確認したのだ。……当の本人は先程の「もし僕が気に入らなければ、咬み殺す」という言葉に恐怖を抱いてるようだが。
そういう私もブルッと震えた。あれは本気だったのだ。そして、偽者という目で見ていたのに咬み殺されずに済んだことに心底安堵した。
「じゃ、待ってるぞ」
安堵している場合じゃなかったな。リボーンが去ってしまった。断るタイミングを完全に逃してしまったのだ。
大きな溜息が出る。もう知識で何とかするしかない。自身のことで頭がいっぱいなので、真っ青になってる彼女を放置し、私は教室に戻ることにした。

5月5日　ａｍ．１１：００

今、私は当てもなく校内の廊下を歩き回っている。
事の発端を話すと、数分前のこと。
雲雀さんが教室を去って行った後、室内はしばらく葬式のような冷ややかな静けさを保っていた。私もそんな空気に圧されて、勉強になかなか身が入らないでいたところに、突如として場の空気に似合わない軽やかな機会音が鳴り響いた。
音のした方に振り返ってみると、スマホの画面を見て血相を変えている新垣君の姿があった。
愕然としたように青く、それでいて激昂したように途中から血眼になった彼は、刹那風も追い抜く速さで教室から飛び出して行った。
さすがはサッカー部の期待の星、なんて素早い動きなんだろう。なんて感心している場合じゃなくて、あの人どこ行く気だ!?
場所も告げずに出て行った彼に習うようにドアへと近づいて廊下の様子を窺ってみるけど、すでに彼の姿はどこにもなかった。
先ほど雲雀さんにサボらないよう警告されたばかりというのに、あんなにも取り乱して、一体どうたんだろう？
さっきスマホの画面を見て血相を変えていたことから、恐らくその中の”何か”が要因で、新垣君はあそこまで顔色を豹変させたんだろう。果たして何を見たのか……　気になる。
それに、先ほどから背中に突き刺さってくる責任を押し付けるような視線が居た堪れず、気づけばそのままドアを閉めて、こうして彼を探しにやって来ていたのでした。
でも、さっきから探しても探しても、新垣君の姿はどこにもない。補習中ということで、廊下にも人の影はどこにも見当たらない。なぜか急に不安になってくる。
もしかして、さっきのは急用で帰っちゃったのかな？
その思考に至ると、確認のために一階のエントランスへと向かって靴箱を確かめた。新垣君の靴箱を調べると、そこには彼の靴がきちんと収められていた。

予想が掠りともしなかったので、思わずその場で脱力してしまった。期待を裏切られたとは、まさにこのことかもしれない。……違うか。

倦怠感が一気に襲って来て、休息も兼ねて靴箱にそっと背を預け、ぼんやりと思考に耽る。

私は一体何をしているんだろう。当てもなく歩き回って、新垣君を探し出すことなんて無謀に近いことなのに……　本当に自分が馬鹿すぎて嫌になる。おまけにドジで、楽しみにしていたゴールデンウィークも補習なんかに呆気なく潰されて、こんなに不幸の連続ばっかりな自分が本当嫌になる。

でも、雲雀さんが言った通り、もっと頑張って勉強していたら、今頃は私も古里に帰っていたんだよね。これは所謂自業自得なんだろう。テスト前日の夜に、我が家のポチがまた脱走して夜間を探し回るハメになんてことにならなければ、赤点は免れたハズなのに……！

後悔なんて所詮後の祭りだけど、やっぱりどうしても帰りたかったんだ。二日前に見送った家族の帰省を心待ちにした笑顔が、今も脳裏にこびりついて離れてくれない。

思い悩んだ挙句に、私は自分の靴箱の前に立った。考えることはひとつ、帰ること。今から荷造りをして、家族の後を追うことはさすがにしない。けど、補習なんてもうやってられなかった。

ゴールデンウィークを丸々使って補習なんて、理不尽すぎる。こんな理不尽な体質を持って生まれてきて理不尽続きの人生に、中学に上がってからは理不尽の塊とも言える人に散々に理不尽に付き合わされて、思えば私の周りって理不尽だらけじゃないの。もう我慢の限界だった。

見つからないうちにここを出ようと、靴箱にそっと手を伸ばす。鞄とか教室に置いてきちゃったけど、ゴールデンウィーク明けにはまた登校してくるんだし、どうでもいいように思えた。

僅かな緊張が身体に走って、この行為への罪悪感からかなかなか靴箱の扉を開けられないでいると、ふと声がかかった。

「何してるの？」

「うっひゃあああ!?」
決心して、ちょうど開けようとしたところにそんな声がかかったのもだから、速攻でまた扉を閉めて代わりに口から奇声が漏れた。
「……何?」
「や、やぁ、雲雀さん、どもー」
「やけに白々しくキャラが変わっているけど」
作り笑顔でにこやかに挨拶したつもりだったんだけど、雲雀さんには効かなかったみたい。
「こんなところで、何していたんだい?」
急所を的確に突かれてしまう。どうしてこの人はこんなにも相手の弱みを握ることに長けているんだろう。
「い、いいえ、別に……　あ、新垣君を探しに来たんです」
テストの時以上に思考を回して、また白々しい言い訳を吐いてしまった。それに、雲雀さんが新垣君に面識があるのかも怪しいのに、彼の名前を出してよかったのか。最悪、補習を抜け出したってことで咬み殺されるかもしれない。ていうか、片手にすでにトンファー常備ですか。
彼の手の中の黒光りする悪魔に視線を奪われていると、その悪魔を従える大魔王様の形容詞が似合うところの雲雀さんが淡々と言った。
「彼なら二年の教室にいたよ」
「……え?二年生の教室に?」
意外にも新垣君と面識があったんだ、と内心で驚く一方で、なぜ二年生の教室に彼が突っ込んで行ったのかさらに疑問が湧いた。
けど、雲雀さんも知らないのか、そのことには答えてはくれなかった。
「それより、君も早く教室に戻りなよ。さもないと、補習を怠ったとみなして咬み殺すよ」
途端に黒光りする悪魔が私の眼前に掲げられる。私は彼の命令に潔く頷くと、すぐに教室へと踵を返そうとする。あの悪魔の前では何も言えない。この理不尽に付き合うしか生きる術はなくて、私は泣く泣く彼の横を通り過ぎようとした。

しかしその刹那、僅かにある段差に足を取られる。
「へぶしゅっ！」
転倒かと思いきや、前に立っていた雲雀さんの体がクッションになってくれたのでセーフだった。でも、顔をぶつけた際にまた変な声が出てしまった。ああ、恥ずかしくて顔上げらんない。
「……またか。ねぇ、平気なの？」
今ボソッとまたかって言った。この人またかって言ったよ。なんかもう慣れてきました風な感じで言いましたよ、この人。こちとらこの理不尽な体質とはもっと長い付き合いなんですよ。
この体質と付き合ってきた過去をふと思い出してみて、なんか泣けてきた。もうこうなったらヤケだ。彼のベストに泣いてベタベタな顔擦り付けてやる。ティッシュ感覚で鼻かんでやる。あとで咬み殺されようがもう知ったこっちゃない。
先ほどクッションになってくれた彼の胸の中にもう一度顔を埋めて、肌触りのいい彼のベストに私の理不尽でベタベタな涙を擦り付けてやろうとした。
その時、私はひとつ気がついたことがあった。
微かにだけど、顔を埋めたことで彼の心臓の音が聞こえてくる。微かに脈打つのが速い、彼の鼓動の音――……。
「……ねぇ」
不覚だった。僅かに熱っぽいような声に、耳がとろけそうだった。
頭上からした声に、反応が遅れながらも顔を上げると、案の定というか、雲雀さんが私を澄んだ漆黒の瞳でじっと見下ろしていた。
改めて間近で見ると綺麗だと思い知らされる彼の魅力に、少し酔ってしまったのか、いきなりのことで身動きが取れなくなる。
その瞳に吸い寄せられるように、しばらくは音もなく、気づけばお互いに見つめ合っていた。
目線より高い位置にある彼の瞳に、魅了されてしまった自分の姿が映る。こんな私を見られているんだと少し恥ずかしくなる。けど、なぜか視線は逸らせられない。
いつもは恐いのに、こんな時はそれを微塵も感じさせない妖艶な雲

雀さんの魅力が、私を惹きつけて離さないんだ。
どれくらい時間が経ったんだろう。実際には数分も経っていないのかもしれない。
「……もう、離れなよ」
その一言で、たちまちハッと我に返る。まるで冷水を頭からぶっかけられたかのように、意識がキンキンとはっきりしていた。
ようやく私は、今の現状を確認した。そして、私は自己最高の機敏な動作で後退り、彼との間合いを取った。
……私、さっき何を考えていた？一体何やってたんだろう？
受け入れられない自身の行動に頭を抱えていると、彼がひとつ溜め息を吐いた。
「君は……　僕の前では本当によく転ぶんだね」
半ば呆れたような口振りで、この場には似合わないことを彼が言った。この場を取り繕っているのか、本心でそう言っているのか、私には図りかねた。
そういえば、彼にはまだ言い忘れていたことがある。
「あ、あのっ、ありがとうございます」
口はあれだけど、転びそうになった私を助けてくれたのは彼の善意だろう。そうであってほしい。だから彼に素直にお礼を言った。
「……これに懲りたら、その体質のことを考慮して軽率な行動は慎むことだね」
素っ気なく言い捨てて、雲雀さんは私に背を向けた。
その背中に向かって、私は思いきって問いかける。
「ひとつ、聞いていいですか？」
「……何？」
「その、本当は知ってて、心配してくれたんですか？」
僅かに速い胸の鼓動も、軽く肩でしていた息も、乱れた黒髪も、クラスの人から私が新垣君を探しに行ったことを聞いて、態々探しに来てくれたのかなって、少し自惚れてみる。
雲雀さんは、横目に私を見ると、溜め息と共に呟いた。
「当たり前でしょ」

「へっ……？」
言い淀むことなく彼の口から漏れた言葉に、嬉しい気持ちが込み上げてくる。
そして、続け様に彼はこう言った。
「君のおかげで、月にいくらの修理費がかかると思っているんだい。他の委員会から巻き上げるのに毎回一苦労だよ」
「――って、校舎かよッ!?」
私から校舎を守るのにそんなに必死だったんですか、そんなに校舎が大事ですか。少しでもカッコいいとか思った自分がドアホでしたよ!!
彼に幻滅して、さらに脱力感が増した気がする。この人はやっぱり噂通りの並盛を愛する極悪非道風紀委員長だ。校舎愛しているなら修理費ぐらい自腹負担しろよ。……とすると、私につけが回ってくるな。よし、口出ししないでおこう。
口を閉じた私を気にすることなく、雲雀さんはふと廊下の突き当たりの角へと視線を投げた。
「……さっきからこそこそ隠れている君、出てきなよ」
最初、彼が何を言っているのか全然解らなかった。
その時、物陰からスッと誰かが出てくる。
雲雀さんと同じ黒髪の、青いリボンタイを付けた女子生徒が立っていた。初めて見る顔だった。私とそう年も変わらないように見えるけど、リボンが青ということで恐らくは先輩なんだろう。
あの距離で気配に気づいていたとか、雲雀さんやっぱりどんだけ……　ていうか、あの人いつからあそこにいたの…？
瞬間羞恥心が体を一気に駆け抜けるけど、その時彼女が雲雀さんに向かってこう言い放った。
「た、誕生日おめでとう」
彼女がそう言って、誰も何も言わずに沈黙が場を支配する。いや待って、雲雀さんは言われている本人なんですから、何か反応してあげたらどうですか？
雲雀さんから反応はあった。やや、小首を傾げた。……何、この

人。自分の誕生日も覚えていないんですか。それとも彼女が言っていることが、そもそもデタラメなのかもしれない。
「あの、今日は雲雀さんの誕生日、なんですか……？」
二人共が一向に喋らないので、仕方なく私が入っていく。会話に全く関係ない人だけど。
彼女から反応はない。ふと雲雀さんを見てみると、彼の方もこっちを見てきたので自然と目が合った。と、ときめいたりなんかしてないからっ！
「誕生日……　そう、だったっけ」
「いや、私を見て言わないでくださいよ……」
雲雀さんの個人情報なんて、私が知るワケがない。逆に他人に自分の誕生日を聞く雲雀さんもどうかと思う。
私が半ば呆れていると、今度はどこからかケーキが降ってきた。
……ケーキ？
「ちゃおッス」
ケーキが喋った!?内心で叫ぶと共に、ケーキを観察してみると、それはただのケーキではなかった。何せ、蝋燭が刺ってある。これはバースデーケーキだ。
「ヒバリ、今日は誕生日なんだろ？」
「そういえば……　そうだね」
バースデーケーキがまた喋った。二回目なので然程驚かないが、バースデーケーキからの問いにも淡々と受け答えしている雲雀さんがなんかすごい。
そして、本人の肯定もあって、今日が雲雀さんの誕生日であることを私は知ったのでした。
話は淡々と進んで、雲雀さんの誕生日会を開くことに決まった。あの群れない雲雀さんが了承したなんて、にわかには信じ難いけど、ところで雲雀さんは今日で何歳になるんだろう？よくよく考えてみれば、私は彼の歳も学年も何ひとつ知らないのだ。この機会に、ぜひ彼のことを知っていきたいと思う。
「もし僕が気に入らなければ、咬み殺す」

が、その一言で心機一転、どん底に突き落とされたかのような気分だった。

彼に気に入ってもらえなかったら咬み殺される地獄の誕生日会なんて……　まだ補習の方が何倍もマシだった。どうしてあの時もっと粘らなかったんだ、そう過去の自分を叱咤したって後の祭りで、気がつけばその場には私だけがポツリと佇んでいた。

5月5日　pm．1：00

「レディース・アーンド・ジェントルマーン!!」
　明るい声が聞こえるが、私のテンションは最悪だった。雲雀恭弥が喜ぶような物を用意することが出来なかったのだ。とりあえず、咬み殺されたくはないので1人でポツンと後ろの方でいる。群れてると思われたくないからな。
　一応、今回の主役の雲雀恭弥は体育館で用意された舞台の上で大人しく座っていた。トンファーがチラチラ見えるのは気のせいである。
「お集まりの命知らずなゲストのみなさま、今宵は何と言っても我らが並中の覇者と在らせられる風紀委員長、雲雀恭弥の生誕日。それを祝賀するために開かれた今回のパーティーでは、参加者のみなさまには一人ｏｒ一組となってプレゼントを用意してもらい、そのプレゼントは１０点満点で評価させていただきます。最高点を勝ち取ったゲストの方には、ひとつだけ、どんな願いでも叶えて差し上げましょう。ただし、気に入らなければその場で容赦なく咬み殺されてもらいます」
　どこからツッコミすればいいのだろうか。まず命知らずのゲストとは私達のことか。うん、知っていた。次は、今は昼だ。今宵ではない。　最後にプレゼントを用意して、なぜ咬み殺される危険があるのだ。理不尽すぎる。……もっとも、私は用意していないが。
「さぁ、栄光は果たして誰の手に……！　ちなみに司会進行は私、東山春奈が務めさせていただきますっ！」
　ついに謎のキャラの名前がわかった。念のため、覚えておいたほうがいいのだろうか。少し面倒である。
「元気だったか？」
　声をかけられ振り向くとディーノがいた。なぜ彼がここにいるのだろうか。恐らくリボーンが呼んだのだろう。
「ディーノ、後で頼みがある」
「任せろ」
　まだ内容を言っていないのに、彼は了承した。相変わらずお人よし

である。
「ちょっと、進行中は私語を謹んでください。そこのイチャイチャしているお二方」
指をさされ、私とディーノは顔を見合わせる。ちょっと待て。これは群れている状態になるのではないのか。ディーノに動けとシッシと手を振る。彼は気を悪くすることもなく、私の頭をガシガシ撫でてから沢田綱吉の方へ行った。
そもそも私とディーノは真剣な話をしていた気がする。怒られるのは理不尽である。やはり雲雀恭弥に関わるとロクなことがない。ゲンナリしながら舞台に目を戻せば、先程よりトンファーが見えるのは気のせいと思いたい。……意外にもノリノリだな。
再び、雲雀恭弥(仮)かもしれないという現実逃避をしていると、始まったようだ。トップバッターは笹川京子と三浦ハルのようだ。
彼女達のプレゼントの内容は知っている。実は誘われたのだ。
「ハル達はヒバリさんに手料理をプレゼントしたいと思いまーす!」
「美味しくできていると思うよ」
そう、手料理だったのだ。女子力の低い私が作れば、恐らく咬み殺されることになっていただろう。誘われたことはとてもありがたかったが、断わるしかなかったのだ。
褒め言葉も言わずに黙々と食べる雲雀恭弥。シュールすぎる。帰ってもいいだろうか。
「うん」
一言だけ呟いた。合格という意味らしい。咬み殺す気はないようだ。せめて、もう少しリアクションしろ。彼女達がかわいそうだろ。
「極限、他に何かいうことはないのかー!」
私と同じことを思ったのか、笹川了平が噛み付いていた。私の兄も似たようなことをする。可愛い妹ために怒ったのだろう。笹川了平の言葉に雲雀恭弥はため息をついていた。どうやら面倒のようだ。
「君のせいで、7点」
「お兄ちゃん!」
「なぜなのだー!? ヒバリー!」

意外と点数が高いなと思った。彼女達だけならば、どれぐらい点数があったのだろうか。ちなみに、妹達に怒られたため、笹川了平は極限なぜなのだーと走り去っていった。不憫である。
「続きましては、二年Ａ組所属ダメツナこと沢田綱吉と、彼と同じクラスで自称彼の右腕こと獄寺隼人のペアによるプレゼンです」
沢田綱吉と獄寺隼人でコンビを組んだのか。沢田綱吉がかわいそうな結果になると予想できてしまうのは気のせいだろうか。それにしても、この紹介は酷いな。今にも獄寺隼人が暴れそうである。必死に彼をなだめることになる沢田綱吉の苦労を少しは考えてやれ。ちなみに私は思うだけで、当然のように助けには行かない。
沢田綱吉のおかげで怒りが治まったようで、２人によるプレゼンが始まった。いったい何をするのだろうか。
「ヒバリのためにやるのは癪だが、オレの今までの研究成果を見せてやる！」
「ご、獄寺君、研究成果って……？」
「もちろん、ＵＭＡ召喚のことスよ。１０代目はオレのマネをしてください！」
獄寺隼人が正座をしブツブツと祈りだした。ドン引きである。もちろん、沢田綱吉もドン引きしていた。
「……君達」
「ひぃ！」
「僕の学校で妙なものを呼び出そうとするなんて、いい度胸だね」
合掌。
さて、次は誰の出番だろうか。謎のサッカー少年と山本武のようだ。またコンビを組むタイプか。不安である。
「さぁ、お次はガラリと趣向を変えて漫才を披露してもらいます」
２人は漫才をするらしい。また難易度の高いものを選ぶとは呆れる。やる気満々なのは山本武だけなようだが、大丈夫なのだろうか。
司会の東山春奈に「やるのはこのお二人、山本武と新垣燕太のスポーツバカコンビ」と紹介されたと同時にツッコミが響く。すぐさま始まるようだ。

「てめっ、春奈！　こんな能天気野球バカと同類扱いすんじゃねーよ！」
「まあまあ、新垣。細けーことは別にいいじゃねーか」
「よくねえわっ！　第一、俺とお前で漫才ってなんだよ！　なんでお前と漫才なんだよ！」
「うん？　そういやぁ、なんでだろなー？」
「聞くなあぁぁ！」
「んー、小僧からもらったバットが最近ハリセンになるからかもな！」
「どんなバットだよー!?」
　サッカー少年のツッコミとかぶさるように「なんでハリセンなのー!?」という沢田綱吉のツッコミも響いた。それも合わさったためか、意外と周りにウケているようだ。
　そんな中、私は別のことを考えていた。まず沢田綱吉はいつの間に復活したのだ。これはやはりツッコミ属性の定めなのかと。もう1つはなぜハリセンにしたのだ。私とキャラがかぶるではないか。今すぐやめてもらいたい。ハリセンが武器で戦えることになれば、私が勝てるわけがないのだ。後でリボーンに文句を言おう。
　全く笑わなかった雲雀恭弥だったが、2人を咬み殺すことはしないようだ。そして結果は、意外にも8点と高評価だった。よくわからない。
「お次はー……。なんと、あの方たちからのサプライズらしいです。では、早速登場してもらいましょう。並中風紀委員会のみなさん＋ヒバードで校歌合唱」
　サプライズと聞いてちょっと期待しちまったじゃねぇーか、バーロー。と心の中で文句を言っていると、不穏な気配がした。
「君達、なに群れてるの……？」
「お、お待ちください！　委員長!?」
　許可なく群れたことにお怒りのようだ。焦っている彼らが不憫すぎる。
「君を祝いたいがために群れることになってしまったんだろ」
　私は参加したくないのにここに居るのだ。そう思うと、つい口を出

してしまい、睨まれてしまった。それにしても、地味に雲雀恭弥に睨まれることに慣れてきた気がする。全くもって嬉しくない。
のんきに考えているが、この状況をどうにかしなければならないな。溜息を吐きながら私は移動し、彼女の肩に手を置き、言い放った。
「そう、彼女が言っている」
彼女の悲鳴が聞こえるが、気のせいである。それに雲雀恭弥と話すことが出来る君なら大丈夫だ。
「……ふうん、君、僕に何か異論があるの？」
「へっ!? いいいいえ！ 滅相もないですよ！」
「早く言えば？ グチャグチャにされたいの？」
ふむ？という感じで首をひねる。雲雀恭弥と彼女の関係がよくわからない。獲物のように見ている気もするが、わざわざ話を聞いてあげる。それに彼ならば、私が彼女に押し付けたということもわかるはずだ。それなのに私には何も言わない。
私が悩んでいるとヒバードがこっちに飛んできた。
「マリヤ、イッショニ、ウタウ」
「私は校歌覚えていないから歌えないよ。ごめんね。でも、雲雀さんのために頑張ってね。ヒバードちゃん」
「ヒバード、ガンバルー」
呆気にとられる。本当に彼女はいったい何者なんだ。ヒバードと会話できる人物なんて原作キャラでもいただろうか。
「はぁ……さっさと始めなよ」
更に驚く。あの雲雀恭弥があっさりと許したのだ。やはり彼女は彼にとって特別な人物なのだろう。
私が再確認していると彼らの合唱が始まった。が、はっきり言って微妙である。校歌合唱をこれほど真剣に歌う声を聞けるという意味では貴重かもしれないが、むさくるしすぎる。
しかし、点数は高得点の９点。なぜだ。
やはりヒバードの可愛さなのか。音程はずれていたが、歌いながら雲雀恭弥の頭に乗るという芸当を見せたからな。誰かヒバードの着ぐるみをしてくれないだろうか。面白いことになりそうな気がする。

恐らく高得点か咬み殺されるかというスリリングを味わえるだろう。もちろん私は遠慮する。

くだらいことを考えている間に、次が始まっていた。イーピンとランボが何かする予定だったらしい。司会の話を聞いていなかったので、何をするつもりだったのかはわからないが、イーピンが雲雀恭弥にほれているため、大変なことになっているのはわかる。

さて、この騒ぎの間に逃げるか。筒子時限超爆の巻き添えは遠慮願いたいしな。

体育館の扉を閉め、上手く逃げれたことに安堵していると「オレに任せろ!!」というディーノの声が聞こえた。

……そういえば、部下はいなかった気がする。思わず扉を開ける。手が滑ったといい、こっちに投げられると困るのだ。

「お前、安全なところに逃げたんじゃなかったのか!? 危ねーから下がってろよ!」

言われなくても近づく気はないぞ。なぜか私がいると体質が改善されるディーノは、ロープを使いイーピンを体育館の外へ投げた。たまやー。

「あめだま、ちょーだい」

足元を見るとランボが居た。君のペアが外に放りだされたというのに、それでいいのか。まぁ面倒なのでツッコミはせず、飴を渡す。

結局、ランボは飴を食べているだけで8点を獲得した。幸運すぎる。私も一緒に参加すれば良かったな……。

「さあて、子どもたちの可愛くてちょっぴりクレイジーなプレゼンの後は、神崎サクラさんによる謎の演目でーす」

ついに私の出番がやってきてしまった。憂鬱である。

「ディーノ、悪いが舞台の方へ行っててくれないか?」

「ん? わかった」

相変わらずお人よしのディーノはすぐに動いてくれる。問題は彼女をどう誘導するか、だな。

「君もディーノと一緒に協力してほしいんだけど」

「えっ? あ……。はい、分かりました」

どうやら成功のようだ。ディーノの名前を出したのが正解だったらしい。彼女とディーノは知り合いのようで、このパーティの間に何度か話していたのだ。
「それで、オレ達は何をすればいいんだ？」
私も舞台に移動したことでディーノが気になって聞いてきた。しかし、私はそれを無視し、雲雀恭弥に話しかける。
「先に言っておく。私は君の好きなものは知っているが、用意していない」
1度、本人の前でペラペラと雲雀恭弥の個人情報を話したことがあった。そのため、私が寿司などを用意しても雲雀恭弥は驚かないのだ。当然という反応になってしまう。どう考えても私にはこのイベントは不利だった。
「だから物じゃなく、君が喜ぶだろうことにしようと思う」
「へぇ」
雲雀恭弥が興味のあるような反応をした。まったく、本当にハードルが高すぎるのだ。
息を吐く。ディーノと彼女の後ろにまわってしまった。もうここまで来たら後戻りは出来ない、開き直ろう。
私のターン！
「ディーノと彼女を生け贄に捧げ、私は君から評価をもらう」
言った瞬間、ディーノから抗議の声があがった。しかし、頼みがあるといえば任せろと君は言っただろ。だから頑張って彼の相手をしてくれ。大丈夫、君なら出来る。
「……強いの？」
「彼は強い。彼女は知らないけど、興味あるんだろ？」
「……じゃぁ10点あげてもいいかな」
獲物を見つけたような目をして、戦闘態勢に入る雲雀恭弥。私はさっさと舞台から降りよう。巻き添えは勘弁である。
「全ては君の腕にかかってる」
「まじかよ……」
いくら私でも女子に雲雀恭弥の相手をしろとは言わない。彼女を

舞台にあげたのはただの点数稼ぎである。つまりディーノが1人で頑張れということだ。まぁ責任を持って離れた位置で見ているつもりだが。
「わっ…!?キャアアアア!!」
「は?」
悲鳴が聞こえた方を向くと、私の前に居たはずの彼女がなぜか後ろの方で転がっていた。そして、ドミノのように倒れていく机をみて唖然とする。
「あぶねぇ!」
ディーノの焦る声が聞こえたと思うと、浮遊感を味わったので何かにしがみついた。
しばらくの間、もの凄い音が響いた。しがみつきながら、何があったのだと焦っていると「もう大丈夫だ」という声が、耳元で聞こえた。この声は――。
「――ディーノ?」
「大丈夫だ。なっ?」
安心させるように背中をポンポン叩かれ、羞恥を覚える。よくわからないが、私はディーノの首に手を回し、しがみついてしまったようだ。
「お、おろしてくれ……」
辛うじて言えた言葉でディーノが私の希望を叶えてくれたことに安堵する。
「咄嗟とはいえ、抱きかかえる形になっちまった。すまん!」
「だ、大丈夫だ。助かった」
ディーノは私を助けるためにしたことはわかっている。それに横抱きじゃないだけましである。ただ、赤ん坊のようにあやすのは、止めてほしかった。
思い出しただけでも恥ずかしいので、誤魔化すようにあたりを見渡す。
「……何があったんだ」
現状をみて呟くしかなかった。全ての机が倒れ料理も台無しに

なっており、私達が居たところは「雲雀さん、誕生日おめでとう」という看板が天井から落ちていた。もしディーノが助けてくれなかったらと思うとゾッとする。
恐らく元凶であろう彼女を見ると、机の上で下敷きになって気絶しているようだ。……文句も言えない。
「はぁ……」
素晴らしい溜息が聞こえたと思い、溜息の主を探すとやはり雲雀恭弥だった。彼は自力で逃げたようで怪我はないようだ。
……この状況はかなり危険な気がする。この惨事の元凶である彼女を舞台にあげた私は咬み殺されるかもしれない。いや、彼なら連帯責任といい、ここにいる全員を咬み殺すだろう。そういう男である。
少しでも助かる可能性をあげるために、ディーノの後ろに隠れる。雲雀恭弥が動く気配を感じ、終わったと思った。
しかし、雲雀恭弥は私達の前を通り過ぎ、彼女の元に向かって抱きかかえた。それも横抱きである。
「君達、片付けといてね」
驚きで声を失ってる間に雲雀恭弥はそのまま去っていった。

「――は？　究極のドジ体質？」
「凄いみたいだよ」
片付けながら沢田綱吉に彼女のことを教えてもらった。それもディーノを上回る体質らしい。
「しかし、まさかワンターンキルの使い手だったとは――」
「え？」
「いや、なんでもない」
それにワンターンキルではなく、自爆スイッチだった気もするしな。雲雀恭弥の体力は多そうだしな。
「それで、サクラはどうするんだ？」
「!?」
急に後ろから声をかけられ、沢田綱吉と一緒に驚く。

私に声をかけた人物はどうやらリボーンだったらしい。本当に神出鬼没すぎて心臓に悪い。咄嗟に沢田綱吉を盾にしてしまった。ちなみに、そのことについては一切謝る気はない。
「サクラが最高得点だからな。ひとつだけ、どんな願いでも叶えてくれるはずだぞ」
微妙な言い回しである。つまり、叶えてくれるのは雲雀恭弥ということか。
これは悩む。下手なことを言って彼の怒りを買うのは怖い。それにもう『私の話に耳を貸すこと』という願いを彼にきいてもらっている状況だ。調子に乗れば、痛い目にあう気がする。
そういえば、と思い出す。明日も学校に行かなければならない可能性もあるのだろうか。明日はゴールデンウィーク最終日だ。ダラダラしたい。
「明日は……――明日は補習なし、で」
「え？」
様子を見守っていた沢田綱吉が驚いたような声をあげる。私だって初めは自身だけのつもりだった。しかし、沢田綱吉が視界に入ったので変更したのだ。これでも私の願いは叶えれるからな。
「補習に参加したけど、効果があるように思えなかった」
「わかったぞ」
あっさりと返事をしたリボーンに違和感を覚える。叶えるのは雲雀恭弥のはずだろ。
「今回の補習はオレがヒバリに提案したからな。オレが頼めば大丈夫だろう」
「そう」
私が納得していると「お前のせいで休みがなくなったのー!?」と隣で沢田綱吉が叫んでいた。ドンマイである。
片付けが終わったころにリボーンから私の要望が通ったと教えてもらった。沢田綱吉に「ありがとう」言われ、やはり彼に礼を言われるのは悪い気がしないと思った。

5月5日　pm．3：00

ぼんやりと、故郷の懐かしい風景が浮かぶ。
小さいながらも、自然の緑に溢れて、里のみんなの活気に満ち溢れている。そこは私の大好きな居場所だった。
本当は、引っ越すなんて嫌だった。お母さんからそのことを告げられた時は、誰よりも頭を振ってわがままを言った。
だってそれぐらい、あの町が大好きだったから。
中学でも、仲のいい友達と新しい学校生活を送って、勉強や部活や恋、いろんなことへの淡い期待に胸を膨らませていた。
なのに、神様は意地悪だ。私の期待を、こんな形で見事に裏切ったのだから。
でも、私ももう小学校を卒業してまたひとつ大人になったんだから、わがままなんて言ってられない。私の勝手な言葉で、親に迷惑をかけちゃいけないんだ。
そう思ったから、抵抗することを諦めて、この現実を受け入れることにしたんだ。
だけど、本心は今でもずっと恋しがっている。心の奥底に、一時だって離れられない未練の思い。
帰りたい、帰りたい、またあの頃の幸せを感じたい。そう何度、胸の中に感情を縛り付けたことだろう。
今までずっとその気持ちを我慢してきたんだよ。ゴールデンウィークには帰ろうねって、約束していたから、それまでずっとこの日を待ち望んでいたんだよ。
でも、現実はいつも冷酷で、私をひとりぼっちにさせる。
ねぇ、神様。どうしてですか？
もう、帰りたいよ――――……。

ふと、頬を伝った冷たい感触と温かい何かの温もりに、意識を取り戻す。
薄っすらと視界に見えたのは、もう随分見慣れた保健室の天井だった。
気力もなくぼんやりとそれを眺めていたら、どこからか耳慣れた人の声がした。
「起きたの？」
はっきりしてきた意識の中で声の方向に振り向くと、雲雀さんがこちらを覗き込んでいた。
気のせいかな。雲雀さんの瞳が、なんだか少し物悲しげに見えるのは……。
「雲雀さん……　おはようございます」
私は雲雀さんにそう挨拶をして、ゆっくりと体をベッドから起き上がらせる。その間にも、雲雀さんが言葉を返してくることはなかった。
「……？　そういえば、どうして保健室にいて……？」
雲雀さんがここにいることも、自分がベッドの上で横になっていることにも、今更ながらなんでだろうと首を傾げる。
少し考えてみて、確か雲雀さんの誕生会を開いたことを思い出した。春奈ちゃんが司会ってだけで嫌な予感はしていたけれど、みんな命知らずで想像以上にカオスだったよ。
まぁ、そのことについては後でいいとして、その後は知らない女の子からディーノさんと一緒に舞台に上がってほしいって頼まれて、生贄に捧げられて、テンパって舞台から落ちちゃって……。
全てを思い出して、カッと目が覚めると共に絶望感に苛まれる。
まさか初対面の子から利用されるとは思わなかったんだもん……。私も雲雀さんに何をプレゼントしていいか思いつかなかったから、ディーノさんも一緒だしＯＫしたのに、なんか酷いよ。なんで近頃こんなのばっかなんだろ……。
「またドジを踏んで舞台から落ちて、そのまま気を失ったんだよ」

私の呟きを聞いていた雲雀さんが、そう無難に答えてくれた。
確かに途中で気を失っちゃったけど、少しだけならまだ覚えている。私のせいで飾りや料理がめちゃくちゃになっちゃって、謝りたいけど体が動かなくて……　そんな時、雲雀さんが――……。
「あの、雲雀さん……　ここまで態々運んでもらって、ありがとうございます」
雲雀さんに向かってそう誠意を込めて頭を下げたら、上からは溜め息が降ってきた。
「礼を言うくらいなら、いい加減その体質をどうにかしてほしいね」
ごもっともな彼の意見に、思わず最初の言葉に詰まってしまう。
「あはは……　ごめんなさい……。また、迷惑かけちゃって」
「……」
いつも雲雀さんに迷惑ばっかりかけて、こんな私だから、神様も意地悪をしたのかな。
周りの人たちを困らせてばかりで、こんな私はいらないのかもしれない。こんな私はいない方が、みんなも――
悲しい思考ばっかり働かせていると、また雲雀さんが呆れたように息を吐いた。つい、ビクッと体を強張らせてしまう。
「言ったそばから、落ち込むんじゃないよ。前を向かないから、またつまずいたりするんだよ」
そう言って、私の顎を掬って顔を強引に持ち上げる。
いきなりのことでびっくりして、顔を上げた途端にぶつかった彼の綺麗な瞳に、不意に胸が高鳴る。
「っ……　ひ、雲雀さん……？」
たぶん、真っ赤な顔を見られまくりなんだろう。恥ずかしさで死にたい。今なら咬み殺されても本望かも。……やっぱりやめておこうかな。
案の定、雲雀さんにはクスリと小癪に笑われ、余計に熱っ気がました気がする。雲雀さんも雲雀さんだけど、今日の私もなんだかおかしいよ。
私の顎からスッと手を離して、にわかにトマトになった私の姿を、

ベッドの隣に佇んで見ていた雲雀さんは何を思ったのか、不意打ちにポツンと呟いた。
「……そんなに、帰りたかったのかい？」
スッと細められた視線が、まるで私の心の奥底を探るように、今まで閉じ込めて鎖を巻きつけていたそれを外そうとするように、私へと絡みついてくる。
どうして、雲雀さんがそのことを――……？
気を緩めないようにキュッと唇を噛んでだんまりしている私を、雲雀さんは上からただじっと見据えている。その漆黒の瞳がどんな目で私を見つめているのか、怖くて視線は合わせられない。
「君が補習を拒んだ理由も、そうだったよね」
「……」
「ねぇ、ドジっ娘」
普段と変わらない口調だけど、私をそう呼ぶ声が、微かに優しい声音に聞こえた。
ベッドが微かに軋んで、すると私の頭に雲雀さんの大きな手が被さる。
雲雀さんの行動には多少驚いたけれど、温かい手がなんだか安心できた。
「並盛は、君の目には殺風景なものに見えていたようだね」
えっ……　と内心で零す。雲雀さんには、故郷を懐かしむ私が並盛を好きじゃない奴だとと思われたのだろうか。それはつまり、並盛を誰よりも愛する雲雀さんとは対立する者、敵＝咬み殺される…!?
密かに迫る身の危機に、どんどん血の気が引いていくけど、雲雀さんは私に牙を向けることなく、静かな口調で、言い聞かすように語っていく。
「でもね、たとえ君の目には白紙の風景にしか見えなくても、ここが今の君の居場所だということはどうにも覆らない。それは、君が一番分かっていて、覚悟していることだよ」
咬み殺すどころか、むしろ優しく頭を撫でてくれる。そんな普段とは似つかない雲雀さんの行動に、多少動揺したけれど、内心では嬉し

かった。
雲雀さんの温かい手――……　さっき頬に感じた温もりと似ているな……。
目を覚ます前に感じた温もりを思い出して、なんだか無性に恋しくなった。
どうしたんだろう。今日の私、どうしてこんなにも情けない姿ばっかり晒してるんだろう。いつもなら迷惑かけないように我慢しようって、なのに……　なんでか止まらないよ――……。
「――……前に、君の弟にも言ったけど、泣いたってどうにもならない」
雲雀さんが告げた時、彼の手がふと私の目に溜まっていたものを掬い取ってくれた。
あ……　この感覚、さっきと同じだ。雲雀さんの優しい温もりが、私のぽっかり穴の開いた心を癒してくれる。
「誰だっていつかは、どんなに大切に思っているものでも、時に離れないとならない。それはきっと運命（さだめ）だ。僕だって、いつかはここを離れなければと思うと、気が気で仕方ないさ」
依然、私の頬から手を離さずに見つめ返してくる彼は、その瞳に言葉通りの不安な色を宿して、私を見据える。
「もう少し、解ってあげればよかった。君の、そんな顔を見るくらいなら――……」
何とも言えない薄笑いを浮かべて、雲雀さんが目を伏せた。同時に、私の頬から温もりが離れて、ふと物足りなさが内側に募る。
無口で無愛想な彼からは想像もしなかった、私に対する気遣いの言葉。今の私は雲雀さんにここまで心配をかけるくらい、情けない顔をしているんだろうか。本当に、雲雀さんには迷惑かけてばっかりで申し訳ない。
でも、こんな時に思うのも不謹慎だけど、少しだけ嬉しかった。だって、改めて彼との距離を近くに感じられたから。以前の頃なら、きっと雲雀さんはこんなに思い悩む私を心配なんてしてくれなかっただろう。

そういう意味では、少しは雲雀さんとの仲も縮まってきたってことだよね――？
「君の泣く姿は、あまり見たくない。なぜなのかは、僕にもよく分からないけれど。だから、笑っていなよ。……でないと、咬み殺すよ」
物悲しそうに伏せられていた顔は、いつの間にか普段の調子に戻っていて、いつもの脅し文句を妖しい微笑みと共に決めた。
咬み殺されるのは嫌だけど、雲雀さんなりに私に同情して、励ましてくれたのかな――？
ふと、雲雀さんの顔を見て、表情が崩れる。
「……何、人の顔見て笑ってるの」
「だって、雲雀さんが笑えって言ったんじゃないですか」
「……」
ムスッとした表情で、彼からは無言が返ってくる。拗ねてしまったみたい。途端に彼がベッドから立ち上がってしまう。
「どこ行くんですか？」
気になって声をかけたら、返ってきたのは案の定機嫌の悪い声音だった。
「どこに行こうが、僕の勝手でしょ。どうして態々君に言わないといけないの」
「あー……　怒っちゃいましたか…？」
「別に」
とか言いつつ、放つ黒いオーラが半端ないです。結構キレちゃってますね、コレは。まだ咬み殺されてないだけマシなのかなぁー……。
「あ、あのー、雲雀さ……　って、わッ!?」
立ち去ろうとする背中に声をかけようとしたところで、バランスを崩してベッドから落ちそうになった。
「はぁ……　見ていないと本当に君は危なっかしいよね」
「ッ～～……」
落ちる寸前で雲雀さんに抱き留められて、至近距離と間近で聞こえる声に、返事なんてまともにできなかった。だだだって、耳に吐息が当たるくらいちち近いッ……！

連鎖反応というか、下駄箱での一端やお姫様抱っこのことを思い出してしまって、余計に心臓がうるさい。
改めて、私はこの時、雲雀さんに男の人としての魅力を感じたんだと思う。
「また君にドジを踏まれても困るから、やっぱり付いていてあげるよ」
溜め息を大仰に吐いて、なんだかんだ言いながらもそばにいてくれるらしい。本音はまだ少し寂しかったから、誰かにそばにいてほしかった。だから雲雀さんの言葉に、自然に笑顔が零れる。
古里も大切だけど、並盛に来て雲雀さんと出会えて、本当によかったって、今なら思えるよ。
雲雀さんに出会っていなければ、ずっと故郷を恋しがって、憂鬱な日々を過ごしていたと思う。でも雲雀さんが、バイオレンスながらも私にいろんなことを教えてくれた。だから――
「――ありがとうございます」
だから、あなたには心から感謝しています。
特に返事は返ってこなかったけど、小さな微笑みを湛えて、雲雀さんはベッドに座り直した。どうやら近くには椅子はおいていないようで、不意に心臓が一際高鳴る。いや、だってかなり近いから……
私、なんか意識しすぎかな？
なんて内心でボソボソ独り言を呟いていたら、隣の雲雀さんからいきなりすぎるこんな発言をいただいた。
「それに、君は僕のものだからね。所有物のそばにいてあげるのは、当然のことだよ」
クイっと顎を掬われて、視線を無理矢理奪われた。
視界に広がるのは、カーテンに囲まれた白い世界に、眩く映る雲雀さんの姿。口元に妖しい笑みを残して、こちらをじっと見据えている。
「え、なっ……　雲雀、さん……？」
「君は僕にプレゼントされたんだよ。だから、君をどうしようが構わないんでしょ。君を咬み殺そうが、ここで押し倒そうが……」
「!?」

「冗談だよ」
冗談……　あなたが言ったらなんだか冗談に聞こえませんよ……。
ただ私の慌てる顔が見たかっただけなのか、私で存分に遊んだ後、雲雀さんはすぐに顎から手を離してくれた。……少し物寂しさが残るのは、気のせいだ。私にM属性が備わっているなんて、考えたくもない。
「ああ、でも……」
チュ……　と、額に何か生温かいものが降り注ぐ。
「おまじない、かけといてあげたから。少し野暮用に行ってくるけど、僕が戻ってくるまでそこで大人しく待っているんだよ」
悪戯猫のように深い笑みを浮かべて、雲雀さんは私にそう言い残すと保健室を離れて行った。
お、おまじないって、そんなキャラでしたか…？いや、そんなことよりも、もっと重要視しなければいけないことがあるハズで……。
思考の先を続けようにも、茹蛸のように真っ赤に火照った頭ではそれも叶わない。
結局、彼に言われた通りここで大人しく悶えているしかなかったのでした。

5月6日　ａｍ．７：００

「たのもー！」
　相変わらずうるさい。兄にランニングを誘う笹川了平の声でまた起こされた。そもそも毎日毎日走りこみしてどうするんだ。
「……？」
　首をひねる。同じようなことを以前にも考えた気がする。謎キャラの出現や雲雀恭弥の誕生日会などがあったが、もしかして今までのは夢だったのかもしれない。つまり、ディーノに背中をポンポンされたのも夢だったということになる。
「よし」
　思わずガッツポーズする。あの恥ずかしいのは夢だったのだ。素晴らしい。
　上機嫌になり目が覚めたので、軽い足取りでリビングに向かうとお母さんに声をかけられた。
「サクラちゃん、休みなのに早起きね」
　今日は休みだっただろうか。夢のせいで日にちの感覚がおかしくなっているのだろう。そもそも休みの日でも早起きする時はするぞ。マンガの発売日とかにな。
　まぁせっかくの休みなのだ。ダラダラしマンガを読もう。

　部屋でマンガを読んでいると兄が部屋に入ってきた。何度も思うが、ノックしろ。
「サクラ、今日からの新作ケーキがあるよ！　時間があるなら、来ればいい！」
　わざわざ声をかけたのは売り切れる可能性があるからだろう。残った時は買って帰ってくれるしな。
「ん、わかった」
「楽しみに待ってるよ！」
　兄はスキップしながら去っていった。動きにはもうツッコミしないが、扉は閉めていけ。

昼ご飯を食べ終わったので、兄の働いてるラ・ナミモリーヌへ向かう。１５時ごろに行けば、邪魔になるのはわかるからな。それに、新作ケーキがなくなるかもしれない。
「キャアアアア!!　ポチごめんなさいぃぃ!!」
何の声だと思い、探したことに後悔した。犬に頭を噛まれている人なんて初めて見たし、その噛まれている人物が夢で見たドジ体質の子だったのだ。……今日が振り替え休日ということには薄々気付いていたさ。直視したくなかっただけである。
しかし、これはどうしたものか。このまま放置すれば後味が悪い。が、私に助けるのは多分無理だ。ハリセンで殴ってもいいが、私が襲われるのは困る。
私が悩んでる間に、勝手に犬が離れたようだ。……リードをつけているということは自分の家の犬なのか。驚きしか出てこない。
とにかく、昨日のこともあるからな。面倒だが、犬に噛まれてベトベトになってる彼女を助けてあげることにしよう。
「……大丈夫か？」
「えっ……。ひッ……!?」
私が声をかけると彼女は驚き、あとずさろうとして踵をつまずかせ、さらに後ろに転んだと同時に壁に頭をぶつけていた。……関わらないほうが彼女のためな気がしてきた。
「だだだ、大丈夫です。いいいつものことですから、気にしないでください……」
どこが大丈夫なのだろうか。口には出さないが、犬くさいぞ。
「……近くに兄が働いてる店がある。タオル、借りれると思う」
戸惑ってる彼女を無視し、犬のリードをひったくる。彼女が持ってると嫌な予感しかしないからな。

店についたが、犬をどうしようかと考える。飲食店に動物はよくないはずだ。彼女にリードを渡して兄を呼んでもいいが、ドジを発動させてもらっては困る。
少し店の前で悩んでいると扉が開く。
「待っていたよ！　サクラ！」
「……よく気付いたな」
兄は厨房？にいるはずだ。それなのに、私が来たことにすぐ気付いたのだ。驚かないほうが無理がある。
「サクラの匂いがしたからね」
ドン引きである。もちろん、私と一緒に居た彼女もドン引きしているようだ。
「冗談さ！　店の子が教えてくれたのだよ」
彼女はほっとしたような顔をしたが、私は未だドン引き中である。まだ私はこの店に数回しか来ていないはずだ。当然のように顔を覚えられてることが変なのだ。恐らく兄が私の写真を何度も見せたのだろう。勘弁してほしい。
「おや？　君は確か電柱の時の……」
「この間はありがとうございました」
どうやら兄と彼女は会ったことがあるようだ。それも会話の流れをみると、彼女は兄の前でもドジを発動したらしい。本当に困った体質である。
「ふむふむ。なんとなくわかったよ！　また彼女が危ない目にあい、心優しいサクラが見て見ぬフリが出来なかったんだね！　流石、僕が愛して止まない妹だ！」
なぜだろう。間違っているわけでもないし、褒められているはずなのに嬉しくない。恐らく最後の一言が余計だったのだろう。残念すぎる。
「少し待ってるがいい！　確か、サクラの服があったはずだからね」
「なぜ私の服を持っている!?」
「もしサクラが転んだときに困るじゃないか」

当然のような顔をして話す兄をみて、納得しかけた。大丈夫だったのは「結局部屋に入って、取ってきたってことだよね……」と彼女が呟いたからである。やはり兄は変態だった。
「悪いが、店に動物はダメだからね。大人しくここで待ってるのだよ」
あっさりと兄は彼女の犬を手なずけ、店の裏で大人しく伏せをさせていた。相変わらず兄は好かれやすいな。
彼女は遠慮していたが、店のシャワーを使わせてもらえることになったようだ。私はわざわざ待つ必要がない気もするが、ケーキを食べる用事もある。1人残されるのは戸惑うと思い、ほんの少しゆっくりと味わうことにした。
「サクラ、美味しいかい？」
「ん。さっぱりしていいかも」
5月に旬がくるフルーツは多いからな。この時期のフルーツタルトは美味しい。それに下のタルトも微妙に凝ってる気がする。
「クレームダマンドを入れて焼いてるからね。そこにテンパリングしたクーベルチュールを表面にコーティング、更にクレームパティシエールをフルーツの接着として絞って、最後にフルーツをナパージュで艶出ししているんだ。サクラが思ったとおり、少し手が込んでるよ」
兄が嬉しそうに語っているが、私にはさっぱりである。
「おっと、彼女が出てきたようだね」
兄に言われ、後ろを向く。彼女の姿が普通のTシャツに短パンだったことにほっとする。変な服だった時はどうしようかと思った。
「君もこちらに来たまえ。ケーキを用意するよ」
「えぇ!? そんな、大丈夫ですよ」
兄は彼女の言葉に全く耳を貸す気はないようで、厨房？に入っていった。しょうがないので、困り果てた彼女に声をかける。
「気にしなくていい。兄のおごりだ」
彼女はまだ遠慮しているようだが、その必要はない。私なんてサイフすら持ってきていないのだ。兄がおごるのはもう決定事項である。もちろん、愉快な人物だからではない。わざとである。

「それに君が気に入れば、リピーターになる可能性もあるしな」
ここまで言えば、彼女は納得したようで私の前に座った。
「待たせたね！」
「あ、ありがとうございます」
待つこともなく、兄がケーキを持ってきた。しかし、そのまま厨房に戻って行った。忙しくなったのかもしれないし、私達に気を遣ったかもしれない。もし気を遣ったのなら、引き止めればよかったな。私に話題を出せというのはハードルが高いぞ。
「……食べれば？」
「はっ、ハイ！　い、いただきますっ」
とりあえず食べるように促した。これでしばらくは会話をしなくても大丈夫なはずだ。
紅茶を飲んでいると、彼女は兄の作ったケーキを美味しそうに食べていた。悪い気はしない。つい、声をかけてしまう。
「美味しいか？」
「はい、とても…！」
「……それは、良かった」
ジッと彼女に顔を見られたので、口周りにクリームがついてるのかもしれない。鏡がほしい。
「お手洗い」
彼女の返事を聞き、席を立つ。さっさとトイレに行こう。

特に顔には何もついていなかった。謎である。少し首をひねりながら、席に戻ろうとすれば騒がしい声が聞こえた。
「ずりぃ！　ねーちゃん！　一人だけここのケーキ食いに来てッ！」
いったい今度はなんだ。少し溜息をつきながら、彼女のところに向かう。
「あっ！　ごっ、ごめんなさい！　お店、騒がしくしちゃって……。こいつは私の弟なんですけど、ポチを見つけて入ってきたみたいで……」

「そう」
「うおっ！　初めて見た、リアル貞子」
「蒼哉ッ！　なんてこと先輩に言ってるのよ！　その、本当にごめんなさいッ!!」
　子どもがいったことなのだ。特に私は気にならない。だが、これ以上店で騒ぐのはやめてほしい。兄に迷惑がかかる。
「ちょっと待ってろ。兄に頼んでくる」
　いい位置に頭があったので、つい撫でながら言ってしまった。ディーノがすぐに私の頭を撫でるのがわかる気がする。
　従業員の人に兄を呼んでもらい頼めば、「サクラの友達なんだ。当然だよ！」と言われた。別に友達ではないのだが。面倒なので、ここは否定せず礼を言った。
「スペシャルバージョンだよ！」
　小学生ぐらいの子どもと教えたため、兄は張り切ったらしい。ケーキがドンっと乗ったパフェだった。……私が食べたい。今度、作ってもらおう。
「レディ達にはこっちを用意したよ」
　流石、兄だ。クッキーを持ってくれるとは、グッジョブである。
「パフェを食べてすぐにはきついだろう？　君の分は包んでるから持って帰ればいい」
　兄はどこまで気が利くのだろうか。さっきまで文句を言っていた彼女の弟なんて、すっかり兄に懐いてしまったようだ。
「あぁああ……。もう、本当にいろいろごめんなさい……」
「あれのどこで、渋々やってるように見えるんだ」
　兄は偉そうに「美味しいだろ！　僕が作ったのさ！」と彼女の弟に言っているからな。それを見て彼女は笑っていた。兄も楽しんでるとわかったのだろう。

「じゃあね！　ねーちゃんと貞子さん」

「貞子じゃないサクラだ！」
「えーと、ねーちゃんとサクラさん、ポチの散歩はオレと桂にーちゃんで行ってくるから」
　なぜ兄も一緒にするのだろうか。休憩時間らしいので好きにすればいいと思うが、やはり謎である。心配で彼女もついていこうとしたようだが、男同士で行くことに意味があるらしい。もう好きにすればいいと思う。
「サクラ、気をつけて帰るんだよ！」
「ん」
　返事をして思い出す。ドジ体質の彼女を置いて行くのはまずい気がする。しょうがない、送ることにするか。
「家、どっち」
「え？」
「服のこともあるし、一緒に行く」
　洗って返しに行くといわれたが、それでは意味がない。それ以前に、返しに来る時に、私の服が大変なことになる気がする。結局、私が譲らなかったため、彼女が折れる形になった。
　油断していると並んで歩いていたはずの彼女が視界から消える。転んだり、電柱にぶつかったりするのだ。もう手をひいて歩いてあげたほうがいいかもしれない。
「手を――」
「何してるの？」
　貸しなよと転んだ彼女に言おうとしたが、美声が聞こえたので振り向く。やはり声の主は雲雀恭弥だった。
「へっ!?　ひゃっ……、雲雀さん…!?」
　奇声のような声を上げ、雲雀恭弥から距離をとる彼女に驚く。昨日はそんな反応をしなかったはずだが。ちなみに、彼女は距離をとった時、壁に後頭部をぶつけていた。
　ゴンっという音がしたので、心配になる。大丈夫だろうか。彼女の顔を見ると泣きそうな顔で真っ赤だった。
　チラっと雲雀恭弥の顔を見ると不機嫌そうだった。

２人の反応をみて、なんとなくわかった。大方、あの後に何かあったのだろう。進展という意味で。
「……リア充め」
ボソッと呟いたため、聞こえなかったようだ。危ないところである。
２人の邪魔になるのは野暮である。さっさと立ち去ろう。
「どこへ行くんだい？」
「……彼女の面倒は君がいるからいいだろ」
「どうして僕が？」
雲雀恭弥の言葉に呆れた顔しか出来なかった。彼は天然でお姫様抱っこをしたのか。
「なら、彼女を１人で帰らせればいいだけの話だろ」
「……風紀が乱れるからね。今回は特別だよ。ドジっ娘」
「うぅ……、はい……」
その特別はいったい何度目なんだとツッコミたい。咬み殺されるので我慢するが。
２人を放置して、私は帰ることにする。しかし、雲雀恭弥の声がいいのはわかるが、彼のどこかいいのだろうか。私にはさっぱりである。
雲雀恭弥と付き合うぐらいなら――。
「なにを考えてるんだ」
一瞬、ある人物の顔が浮かんだが、あほらしくなった。相手が原作キャラとなれば、余計にあほらしくなる。
「――なさい」
「ん？」
声が聞こえた気がする。しかし、周りには誰もいない。気のせいだろうか。
「う……」
視界が歪み、気持ち悪くなってきた。慌てて壁に寄りかかる。少し楽になるかと思ったが、どんどん具合が悪くなる。ついに視界が真っ暗になった。

5月6日　pm・3：00

最初は正直、びっくりしたし困惑したし、いきなりで何考えてるのか解らなくて怖かった。

先輩っていうこともあって、私は昨日の一件を思い出して、内心で冷や汗がダラダラとしていた。また何かされるんじゃないかって、犬の唾液だらけになった顔をギュッと固く結んでいた。

「大丈夫か？」

ずっと怖い人と思っていたから、その心配そうな声にはすごく驚いた。

その人に連れられてやって来た並盛商店街のラ・ナミモリーヌで、偶然にもまた彼に出会った。

「あっ、電柱の時の……」

昨日、考え事をしていて目の前の電柱に気づかず、ぶつかりそうだった私を親切にも助けてくれた人だ。

話を聞けばどうやら彼女のお兄さんのようで、ここラ・ナミモリーヌで働いているらしい。

キラキラと眩しく輝く彼の笑顔に半ば気圧されて、こんなベトベトな格好で店内に入ってシャワーを借りることになってしまう。そんなに気を遣わなくても、家も近いし自分家でシャワー浴びられるのに……。

ふと、着替えをどうしようと心配が頭を過る。でも、用意周到な彼女のお兄さんが彼女の服を快く貸してくれた。チラッと隣を見てみれば、至極不満そうな顔をしていたので、最初は謝って帰ろうかなとも思った。

「……気にするな。使えばいい」

彼女は私からの視線に気づいて、私の内心を悟ったようで、無難ながらも優しい瞳で言ってくれた。そんな彼女に甘えて、私もついついお世話になってしまった。

シャワーから上がればケーキまで食べていいと言われて、遠慮もままならず旬のフルーツが沢山盛られたタルトケーキが私の前のテー

ブルに置かれる。おっ、美味しそう……。つい涎が垂れてしまいそうだった。
隣に座る彼女からの勧めと、甘い誘惑に勝つことができずに結局ケーキをいただくことになった。
想像以上の甘美なケーキの味わいに、思わずだらしない笑みが零れる。そんな私を、彼女もケーキを咀嚼しながら穏やかな目で見つめてくれた。
彼女が一旦席を立てば、店の外からはポチの元気な吠えが聞こえてくる。少し躾がなっていないところがあるので、通りかかる人に無闇矢鱈に吠えていないか心配である。
少し様子を見に行こうかな、と腰を浮かせた時、豪快に店の扉を開けて弟の蒼哉が入店してきた。
ちょうど私が体力的にも精神的にもフラフラな状態でいた昨日の夕方頃に帰ってきた蒼哉は、何ひとつ変わらない態度で私を捉えて告げる。
「ねーちゃん！ポチの散歩に行ったハズなのに、どうしてこんなところでケーキ食ってんだよ！ずりぃぞ!!」
私に悪態をいろいろ吐くも、本心は語尾の最後に必ずつけられる「ねーちゃん、ずりぃ！」の言葉で、こいつも単にケーキが食べたいんだなと内心で察した。
でも、そう呑気に考えている場合じゃない。店内でこんなにうるさく騒いでいたら他のお客に迷惑がかかっちゃう。戻ってきてこの口論を聞いていた彼女に勢いよく頭を下げながら、礼儀を弁えない奴の口の本気で潰さんばかりに掴んだ。
もうこいつを追い出すと共に、この場から消えようと口を開こうとする前に、彼女がお兄さんを呼んできて丸く収めてくれた。というのも、ケーキが上にドーンッと乗ったパフェなんかを蒼哉の前に出して、そのまま彼に食べていいよなんて勧めている。って、違うッ!!
さらに彼らに迷惑をかけてしまった。蒼哉も、もう少し遠慮というものを覚えようね。そんな餌にかぶりつく犬みたいにパフェ食べなくたって……　姉として私がどれだけ羞恥に耐えているか察しろ

よ。
頭をペコペコ下げ続ける私を見下すことはしないで、彼女の方はむしろこれが当たり前というようにクッキーを口に再び席を勧めてくる。まるで、せめて昨日のことの償いみたいに……　そう思うと少し気が楽になって、お言葉に甘えて彼女とのお茶を楽しむことにした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ラ・ナミモリーヌを後にして、私と彼女は家路をトボトボと歩いている。
周りがやけに静かなのは、蒼哉とお兄さんにポチの散歩を任せたから、今は彼女と二人きりでこうしているワケだ。
それに「送るから」と言われて、少々戸惑ったけれど、服のこともあるし彼女がなぜか頑なに譲ろうとしないので、私が折れて彼女に従うしかなかった。先輩だしね。
さっきまではずっと怖い人だなって思っていたのに、話してみたらすごく控えめな親切を持った優しい人だという印象に変わっていた。たぶん、表に感情を出して表現するのが少し苦手な人なんだろう。なんだか、素直になれないところが雲雀さんに似ていて、親近感が募った。
つい小さな笑みが零れてしまったことには、彼女には内緒にしておこう。
そういえば、彼女は雲雀さんとはどんな関係なんだろう。雲雀さん自身でさえ忘れていた彼の誕生日を知っているなんて、ただの知り合いではないハズ……　どうしてこんなにも雲雀さんのことを気にしているのよ、私。あれだよ、話題にもちょうどいいからだよ。きっと。
静かな空気を切り裂くように、私のかけ声ではなく、驚いたような奇怪な絶叫が響いた。
見上げれば、彼女が「大丈夫か？」とちょっと引き気味な様子でこちらを窺っている。

靴底のバランスを崩して前方にすっ転んだ私は、それを発車にか次々と彼女の前でドジを踏んでは、彼女に上から情けをかけるような何とも言えない視線をいただいた。うー……　普通にめっちゃ恥ずかしいよー。

もう何度目かになる転倒をした後、どこからか声が聞こえてきた。同時に胸に詰まったような圧迫感を感じて、うるさい心臓を抑えるように拳を当てた。

「何してるの？」

そう言って、休日にも拘らず制服を着込んだ雲雀さんは、腕を組んでなぜかじっと私を見据えた。

黒い双眼の瞳に見られた途端に、保健室での一端がフッと頭を過ぎり、私は我慢ならずにまた変な奇声を発しながら彼と距離を置くため後退った。けど、後ろに控えていたらしい某民家の石塀に勢いよく頭をぶつけてしまった。

ゴンッと綺麗な打撃音を立てて、私はズルズルと塀に沿って腰を下ろしていった。い、イタすぎる……　いろいろ……。

ポソッと、私の惨劇を見ていた彼女が何かを呟いたような気がしたけど、後頭部の痛みとふたつの視線のイタみに何も言葉が出ない。私を余所にされている会話にも、聞く耳なんて持てない。

悶々と自分の混乱する思考に浸っていると、微かに雲雀さんの声がして、私の意識を剥奪する。終いには、なぜか雲雀さんに送ってもらうことになり、もう最高に憂鬱だ。

気がつけば彼女の姿はそこにはなくて、先に行ってしまったんだと内心で悟る。なんだか、少し虚無感が残る。道の彼方を見据えて、彼女にはもう会えない。そんなことを、なぜかこの時思ってしまった。

「あの、雲雀さん。あの人の名前、なんて言うんですか？」

「ワォ、名前も知らない相手とずっと群れてたの。馬鹿だね」

少し前を歩く雲雀さんから、そんな風に鼻で笑われる。言い返したいんだけど、転ばないようにって彼から繋がれている手を意識したらもう先が続かない。

「神崎サクラ、それが彼女の名前だよ」

神崎サクラさん……　そう名前を胸の内で復唱して、彼女の服をキュッと空いている手で掴む。
さよならもありがとうも言いそびれちゃったけど、また会いたいな――……。
切に願いを込めつつ、歩みを彼に沿って進めていると、プツンと何かの糸が絶ったように、途端に視界が色彩を帯びて歪んでいく。
な……　何？なんだか、視界がグラグラする……。
「大丈夫かい？」
目眩に苛まれ、倒れそうになる私の体を、ギリギリで雲雀さんが庇ってくれる。雲雀さんの繊細で力強い手が、私の肩を支えてくれて、近い彼との距離に少しドキッとしてしまった。こんな時に、私は何を意識しちゃっているんだろう。
「はい、大丈夫です……。なんだか急に目眩がして……」
「そう……　僕もだよ」
雲雀さんも異変を感じたようで、そのまま私の肩を抱き寄せて、辺りを見渡している。
すっぽりと彼の胸に収まった私は、さらに心臓の高鳴りを自覚しながら、思考の淵でふと湧いた感情に戸惑った。
「あの、雲雀さん……」
「何？」
チラリと、雲雀さんがこちらを覗いてくる。
「……私、何かとても大切なことを忘れてしまったような……　よく思い出せないけど、また会って、何かを伝えなきゃって……」
自分でもよく分からないことを言っているけれど、胸にぽっかりと穴が空いたような寂しさが拭えない。思い出せなくて、さらに悔しさが込み上げ、表情が悲しく歪む。
すると、後頭部に優しい力が加わり、私の顔が雲雀さんのベストの生地に静かに沈んでいく。
「また……　その時が来れば、思い出してあげればいいよ」
優しくて心地いい雲雀さんの声。
また、か――……　そうだね。いつか、きっとまた――

雲雀さんの言葉を信じて、少しの間は彼の温もりに、身を委ねることにした。

5月6日　pm．4：00・エピローグ

「ん……」
兄の呼ぶ声がしたが、もう少し眠りたい。温もりに捕まろう。
「……目が覚めたなら、自分で歩きなよ」
美声が聞こえ、覚醒する。そして、声にならない悲鳴をあげてしまった。なぜ私は雲雀恭弥の背におぶさってるのだ!?
雲雀恭弥は私が完全に起きたと判断したようで、あっさりと手を離した。落ちるだろ!?
「サクラ!?」
しかし、衝撃はなかった。地面に尻を打ちつける前に兄が私をキャッチしたようだ。ナイスである。
「雲雀君、サクラに何があったんだい!?」
「道端に転がってた」
もう少しましな言い方はないだろうか。まぁ咬み殺さずに運んでくれたことを考えれば、かなりラッキーな気もするが。
しかし、なぜ私は道端で転がっていたのだろうか。全く思い出せない。
「サクラ、何か変なところはないかい!?」
「……痛い」
心配させたのはわかるが、ギュウギュウと力強く抱きしめられると文句を言いたくなる。
「はぁ……次はないからね」
「ありがとう！　本当に助かったよ！　雲雀君！」
「悪い、迷惑かけた」
私達の言葉に反応もせずに彼は歩き出した。その後姿を見て、あることを思い出す。
「1日遅くなったが、誕生日おめでとう」
彼は一瞬だけ立ち止ったが、そのまま去っていったのだった。

「戻されたか……」
オレが思っていたより早い。
あいつはこうなることも予測していたのだろう。
そのことに苛立つが、収穫はあった。
「向こうの手駒はあいつか」
オレが手駒を送り込んだ時にあいつも同じことをする可能性が高かった。
だからオレはずっと探していた。
目星はつけていたが、確証はなかった。
オレにはこの世界のことがわからないからな。
……正確にはわからなくなった。
初めて邪魔をした時にその力を奪われた。
あいつは隠したかったんだろう。
だが、オレが動いたことで向こうも使うしかなかった。
おかげで、あいつの手駒がわかった。
「それでも厄介だな」
オレの手駒が消さなければならない。
だが、向こうも対策を立てている。
直接手を出せないことが、やはり面倒だ。
「ふっ」
鼻で笑う。
あいつは本当に正しいことが好きらしい。
いや、優しすぎると言った方がいいだろう。
「まさかオレの手駒も救うつもりだったとは――」
手駒の力を解放した時に違和感があった。
あいつから手を出せるわけがないのだ。
たとえオレの手駒とわかっていても――。
だからあいつは自分の手駒をつかって外部から内部に干渉した。
そのせいでオレの思惑通り進まなかったのだろう。
苛立つが、その結果からわかることもある。

「あれはオレの手駒だ」
力を振るわなくても、これであいつに嫌がらせ出来る。
時間がかかるだろうが、今更だ。
それに待ってる時間も楽しみになった。
「どうせなら、向こうの手駒にも絶望を味わわせよう」
そう考えたが、不可能かもしれないことに気付く。
人間は弱い。
向こうの手駒だとしてもあっさり死ぬかもしれない。
まぁ死ねば、干渉がなくなり、オレの手駒が動く。
つまりオレが考えていた最初の予定に進むだけだ。
「せいぜい……あがけ」
あがけばあがくほど、面白くなる。
オレはあいつの歪む顔が見たい――。